

石川県埋蔵文化財情報

第 23 号

巻頭図版（北安田南遺跡、成町遺跡）

平成21年度上半期の発掘調査から ……………調査部長 三浦 純夫…(1)

発掘調査略報

長池ニシタンボ遺跡 ……………(2)

興徳寺 B 遺跡 ……………(4)

成町遺跡 ……………(6)

北安田南遺跡 ……………(8)

末松廃寺 ……………(10)

中新保遺跡 ……………(12)

平成21(2009)年度上半期の遺物整理作業 ……………(14)

環日本海交流史研究集会の記録

「日本海域の土器製塩」

はじめに ……………所長 湯尻 修平…(18)

発表概要 能登半島における土器製塩研究の課題 ……………戸淵 幹夫…(19)

北部九州の土器製塩について ……………平尾 和久…(22)

山陰地域における土器製塩とその系譜 ……………増田 浩太…(25)

若狭湾沿岸の土器製塩 ……………杉山 拓己…(28)

能登地方の土器製塩遺跡 ……………空 良寛…(31)

富山県の土器製塩 ……………大野 究…(34)

新潟県における製塩関連遺跡 ……………尾崎 高宏…(37)

東北地方の土器製塩 ……………柴田陽一郎…(40)

討論と展望 ……………荒木麻理子…(43)

調査研究・報告

石川県金沢市金石本町遺跡出土木簡について ……………平川 南・武井紀子・大西 顕…(5)

石川県金沢市豊穂遺跡出土の木製卒都婆について ……………藤澤典彦・岩瀬由美…(1)

2010年3月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

写真解説

北安田南遺跡

全景（南から）

JR松任駅から南西に約1.2km、北安田陸橋の南に位置する遺跡。今回の調査区は線路の両側で、弥生終末期頃の竪穴建物や掘立柱建物、中世の掘立柱建物などが見つかった。

竪穴建物（SI01）全景（西から）

弥生時代終末期頃の比較的大型の竪穴建物。竪穴部の周囲に小さな穴の跡が多数発見されたが、南東方向にのみこのような小穴群が認められなかった。これは竪穴建物の構造、特に出入口について考える上での資料となろう。



全景（南から）



竪穴建物（SI01）全景（西から）

写真解説

成町遺跡

成町遺跡と北陸新幹線関連調査遺跡（北東から）

線路沿いに北陸新幹線関連の調査遺跡が並んでおり、手前の成町遺跡から北安田南遺跡まで300m、奥の高見遺跡まで500mほどの距離がある。

成町遺跡と北安田南遺跡は同時期の遺跡であるが、両者の間には谷地形を挟んでいることから別の集落と考えられる。

竪穴建物（西から）

古墳時代前期の竪穴建物であり、一辺約7mを測る。床面では柱穴4基と貯蔵穴、中央には灰穴炉と考えられる浅い窪みがみられる。壁溝が2重に巡ることから、同じ場所で補修もしくは建て替えたことがわかる。また壁溝に沿って径5～10cmほどの小穴を多数検出した。壁板を固定する杭の痕跡である可能性が高いと考えている。



成町遺跡と北陸新幹線関連調査遺跡（北東から）



竪穴建物（西から）

平成21年度上半期の発掘調査から

調査部長 三浦 純夫

平成21年度は、石川県教育委員会から21件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの件数は、国土交通省が3件、鉄道・運輸支援機構が11件、最高裁判所が1件、県土木部が5件、県立中央病院が1件である。

本号では、4月から9月に実施した6件の発掘調査の概要を紹介する。

輪島市三井町興徳寺に所在する興徳寺B遺跡は、古代・中世の集落で、掘立柱建物、井戸などを確認した。

野々市町末松廃寺の調査箇所は国指定史跡末松廃寺史跡公園の南に接している。古代の溝やピットを確認したが、遺構の密度は希薄である。

長池ニシタンボ遺跡は手取川扇状地扇央部に立地する弥生時代と中世の複合遺跡で、安原川の改修にともなう調査である。弥生時代後期の竪穴建物を2基を確認したほか、中世の開発に関わる大溝も検出した。

白山市中新保遺跡は海側幹線の建設等に伴う調査である。弥生時代から中世にかかる集落で、平成18年、同20年の調査に続く第3次調査である。これまでに確認した主な遺構は溝に囲まれた中世の屋敷で、今年度の調査でも掘立柱建物を1基確認した。

白山市成町遺跡、同北安田南遺跡は北陸新幹線の建設に伴う発掘調査である。成町遺跡は、弥生・古墳時代の集落で、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかかる竪穴建物、掘立柱建物、土坑と中世の掘立柱建物を確認している。北安田南遺跡は成町遺跡の西に近接して存在する。弥生時代および古代・中世の集落を確認した。弥生時代は、後期後半の竪穴建物、掘立柱建物を確認し、古代は畠と思われる細溝群が明らかになった。また中世では掘立柱建物や土坑を検出している。



興徳寺B遺跡



北安田南遺跡

なが いけ 長池ニシタンボ遺跡

所在地 野々市町長池町地内
調査面積 850㎡

調査期間 平成21年4月15日～同年7月2日
調査担当 松山和彦 稲葉浩一



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・ 弥生時代終末期の竪穴建物を検出し、その脇を流れる溝からはまとまった量の遺物を得た。
- ・ 中世後半頃の安原川河道や基幹的な用水路などを確認した。

長池ニシタンボ遺跡は野々市町の北西部、JR野々市駅の西側に所在する。遺跡のすぐ西側を安原川（手取川水系の七ヶ用水のうちの郷用水）が北に向かって流れており、付近の標高は13m前後である。

今回の調査は安原川の改修工事に先立つものであり、弥生時代終末期を中心とする時期（Ⅰ期）と、中世後半から近世初頭にかけての時期（Ⅱ期）の遺構・遺物を確認した。まずⅠ期を

代表する遺構には2棟の竪穴建物があり、うち1棟には円形（直径約14m、幅約50cm、深さ約30cm）の外周溝が伴うとともに、その内側で一辺が8m前後の隅丸形状の壁周溝が認められた。外周溝の西側は南北に流れる溝（幅約150cm、深さ約70cm）に接続しており、この上層からはまとまって廃棄された状態で土器が出土した。残る1棟の建物は先述の建物のすぐ北に接し、外周溝間の切り合いから时期的に後出する。以上から前方後方墳を含め、弥生時代終末から古墳時代前期に至る時期の遺跡が周密に分布する安原川水系における集落形成の一端を垣間見ることができる。

Ⅱ期に属する遺構としては幅3mの基幹的な用水路と考えられる溝があり、その北端は安原川の旧流路に注ぐと推定される。また、この用水路から取水した小溝が東に並走する状況も確認できる。これらの遺構からは中世後半を中心とする時期の遺物出土しており、下限は17世紀前半頃（肥前磁器出現以前）である。遺跡付近は中世後半には天龍寺領横江荘の荘域の一角を占めたと推定され、中世荘園における農業開発を物語る遺構といえよう。（松山和彦）



全景（北から）



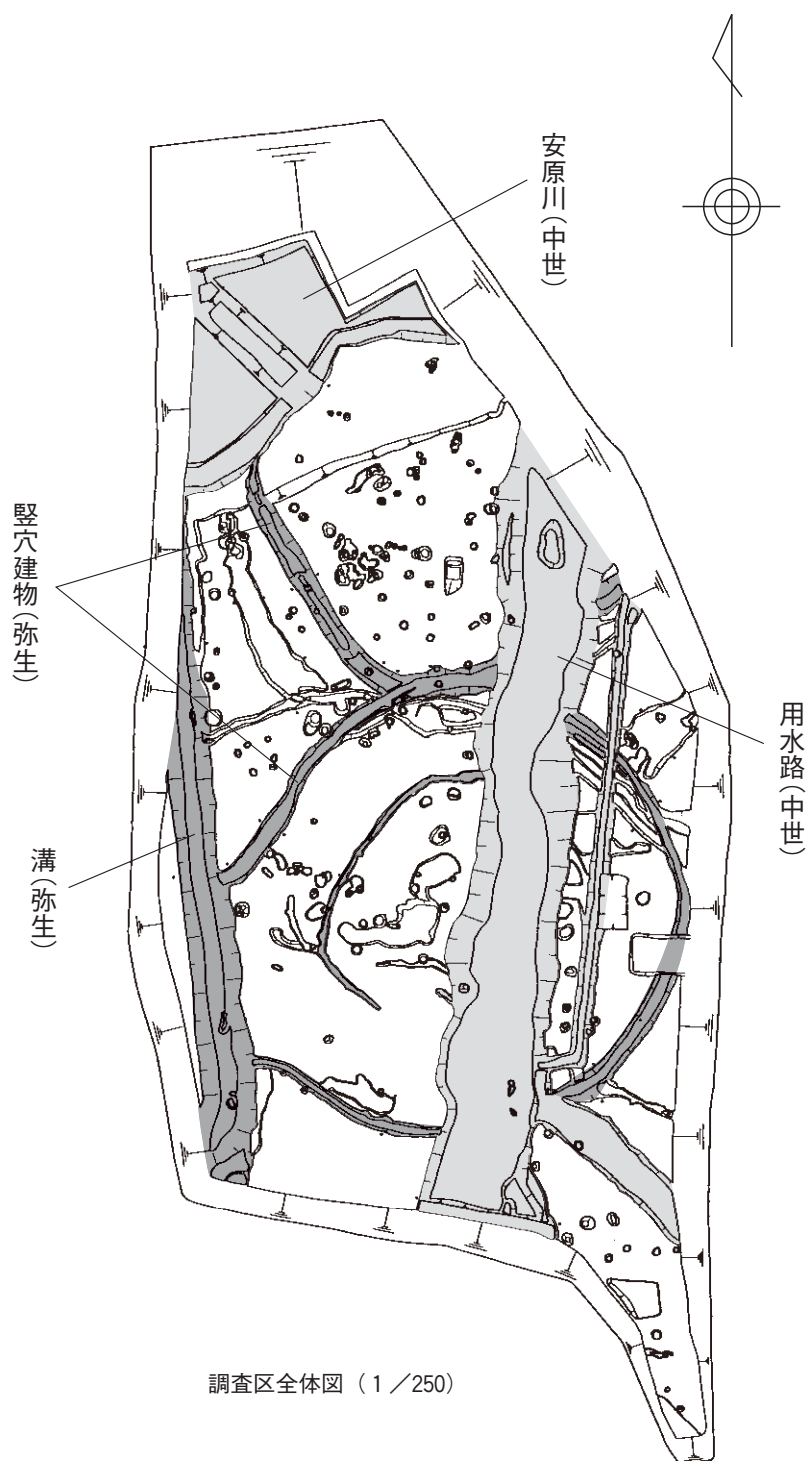
弥生時代の竪穴住居



弥生土器出土状況



中世の用水路



調査区全体図 (1/250)

興徳寺 B 遺跡

所在地 輪島市三井町興徳寺地内
調査面積 950㎡

調査期間 平成21年5月11日～同年6月29日
調査担当 土屋宣雄、荒木麻理子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

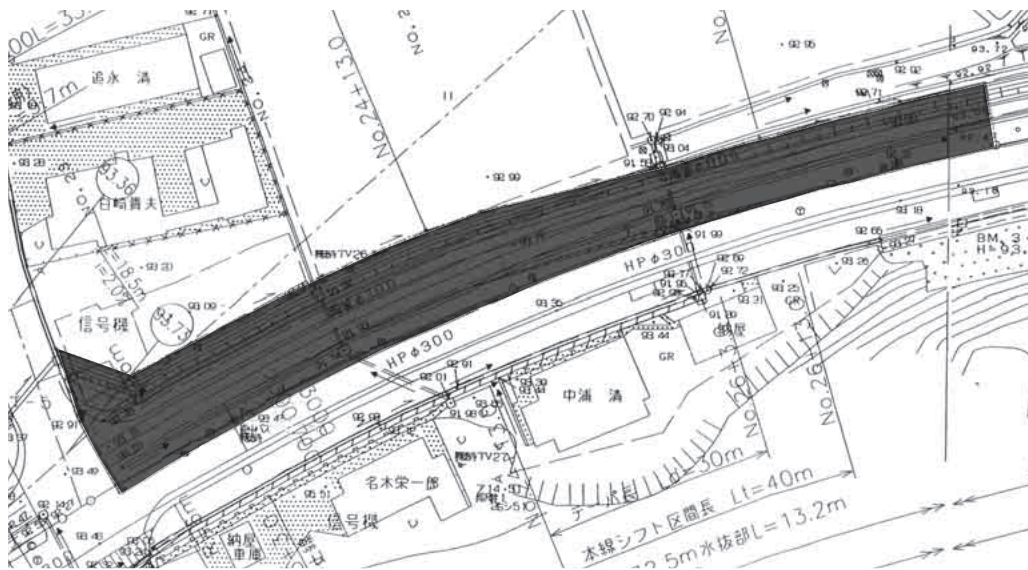
- ・遺跡は、輪島の市街地を流れる河原田川中～上流域左岸の段丘上に立地する。
- ・奈良・平安時代および鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。

興徳寺B遺跡は、輪島の市街地を流れる河原田川中～上流域左岸の段丘上に立地する遺跡である。調査原因は、いしかわ広域交流幹線軸整備事業（主要地方道七尾輪島線）である。調査区は面積950㎡で、ほぼ南北方向に延びる狭長な形をしており、調査区東辺で、穴水と輪島市街地を結ぶ県道1号線と接している。また、本調査区は、2001年に廃線となった旧のと鉄道七

尾線（穴水－輪島間）の路線内であったことから、調査区全域に線路敷きの碎石や、標識や、ケーブル等の設備がそのまま残されているほか、調査区北部では線路敷設による攪乱を大きく受けている。

調査では、奈良・平安時代および鎌倉時代の集落跡を確認し、井戸、掘立柱建物、土坑、小穴などの遺構を検出した。遺構は調査区中央部で検出された鞍部の周辺で比較的密に分布しており、調査区の南北で密度が希薄になる傾向があった。遺構からは須恵器、土師器、珠洲焼等の遺物が出土している。また、一部の柱穴からは、完形の土師器皿がまとまって出土しており、建物撤去の際に埋納されたものと思われる。

(荒木麻理子)



調査区位置図 (S=1/1,000)



遺構検出作業



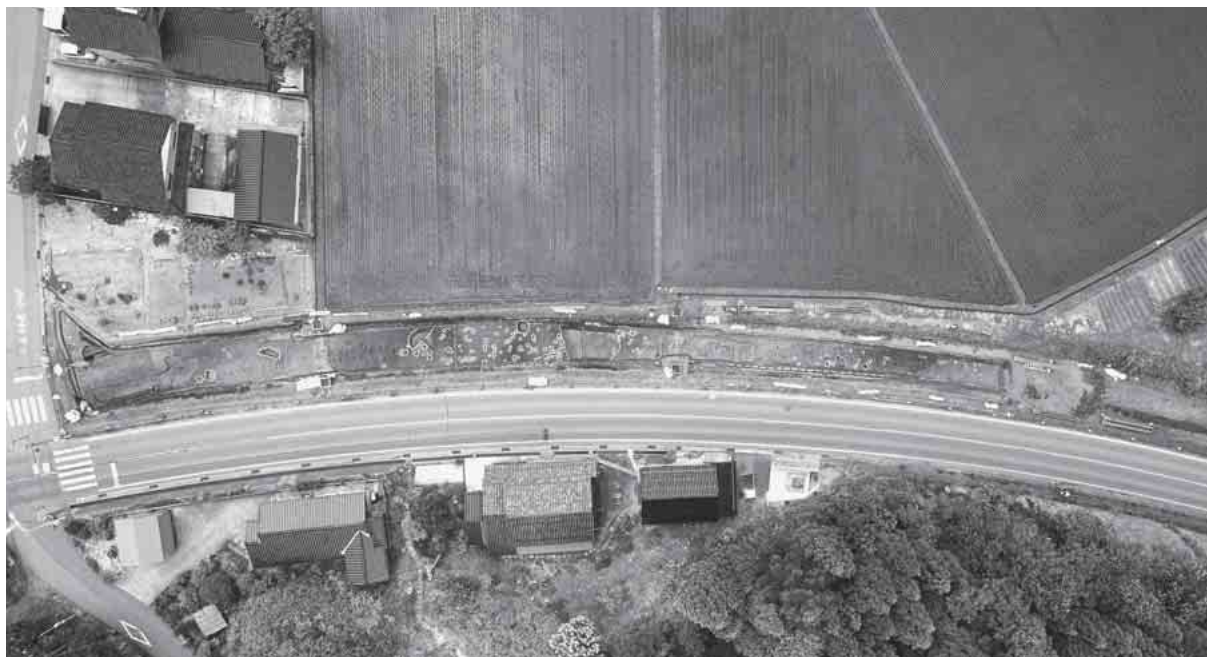
土師器皿出土状況



井戸



掘立柱建物



遺構完掘状況

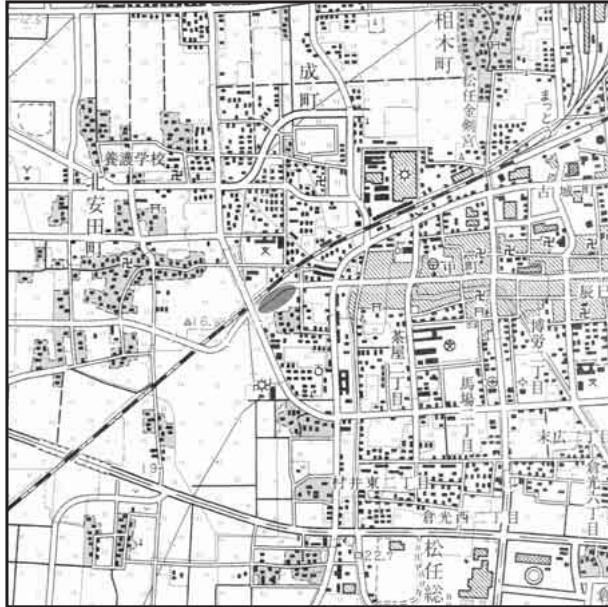
なりまち 成町遺跡

所在地 白山市成町地内

調査期間 平成21年4月14日～同年8月19日

調査面積 2,300㎡

調査担当 立原秀明、森 由佳



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・ 弥生時代終末期～古墳時代前期の集落を確認した。
- ・ 弥生時代終末期～古墳時代前期の遺構は、竪穴建物、掘立柱建物、布堀建物、土坑、溝、川などを確認した。
- ・ 鎌倉・室町時代は、東-西方向へのびる溝を確認した。

成町遺跡は、手取川扇状地の扇中央部に位置する。発掘調査は、北陸新幹線建設（車両基地路盤整備等）を原因としている。調査地は、JR線路に並走する市道沿い部分であり、3地区に分割して調査を行なった。

周辺には、東北東方向1kmの位置に松任城

跡、北東方向300mには松任城の出城と考えられている出城跡、JR線路を越えた北側には木曾街道と伝えられる道があり、北西方向には、北安田南遺跡、高見遺跡などがみられる。

遺構検出面での標高は、南西-北東方向に長い調査地の両端で約16.9m、中央付近で約17.3mを測り、両端が低く中央付近が微高地状に高い地形となっている。

本遺跡は、弥生時代終末期～古墳時代前期を主体とする集落遺跡の一部であり、検出した主な遺構には、竪穴建物、掘立柱建物、布堀建物、土坑、溝などがあり、北東端では南東-北西方向に流れる川跡を確認した。

竪穴建物は、調査地の西側にあり、方形プランで一辺約7mを測る。床面では柱穴4基と東壁付近に貯蔵穴を検出し、中央には灰穴炉と考えられる浅い窪みがみられた。壁際には壁溝が2重に巡ることから同じ場所で補修もしくは建て替えが行なわれたものと考えられる。また壁溝に沿って杭痕の可能性が高い小穴を多数検出した。遺物は、古墳時代前期の土師器が出土している。

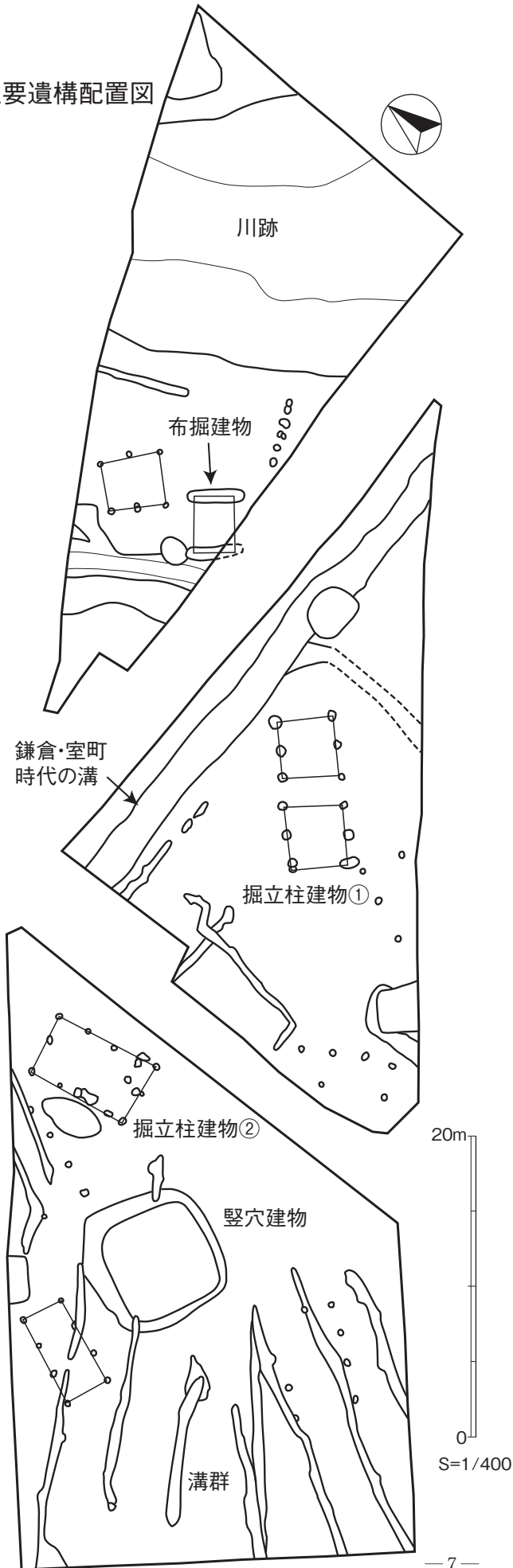
掘立柱建物は、複数棟を検出しており、竪穴建物の北東方向5mの地点では2×4間(4×7.2m)規模のものや、中央部では1×2間(3.8×4m)のほぼ同規模といえる2棟が並んで検出された。

布堀建物は、調査地の東側で長さ4m幅1m深さ0.7mの溝と西側3mの地点で対となる溝を検出した。規模は、土層断面の観察から、それぞれの溝に3本の柱がある1×2間とみられる。

調査地の北東端では幅約18m深さ1.7mの川跡を検出した。遺物は、覆土の中・上位層では弥生時代終末期～古墳時代前期の土器を出土するが下位層では確認できないことから、この時期には最深部から半分ほどまでが埋没していたものと考えられる。また、川跡の対岸にあたる北東側にも遺構・遺物が検出されることから、集落の範囲は広がる可能性が高い。

鎌倉・室町時代は、東-西方向へ直線的にのびる幅2mほどの水路とみられる溝を検出した。青磁や土師器皿が少量出土している。ほかには時期不明の遺構として、調査地の南西端で溝群を検出した。長軸の方向から2グループに分かれる。 (立原秀明)

主要遺構配置図



川跡(北東から)



布掘建物(北西から)



掘立柱建物①(北東から)



掘立柱建物②(北から)

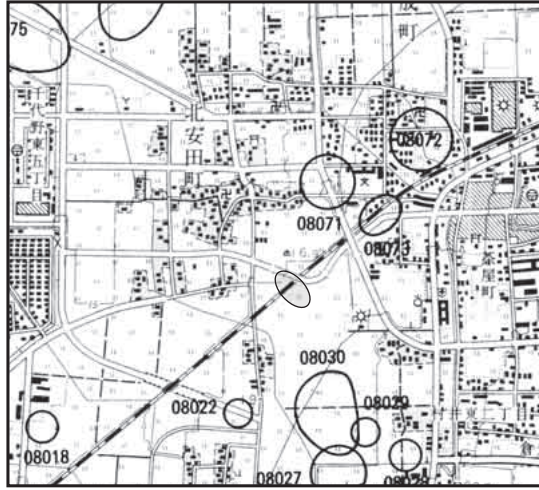
きた やす だ みなみ
北安田南遺跡

所在地 白山市北安田町地内

調査期間 平成21年4月27日～同年8月12日

調査面積 4,300㎡

調査担当 浜崎悟司 白田義彦 大西 顕 中泉絵美子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

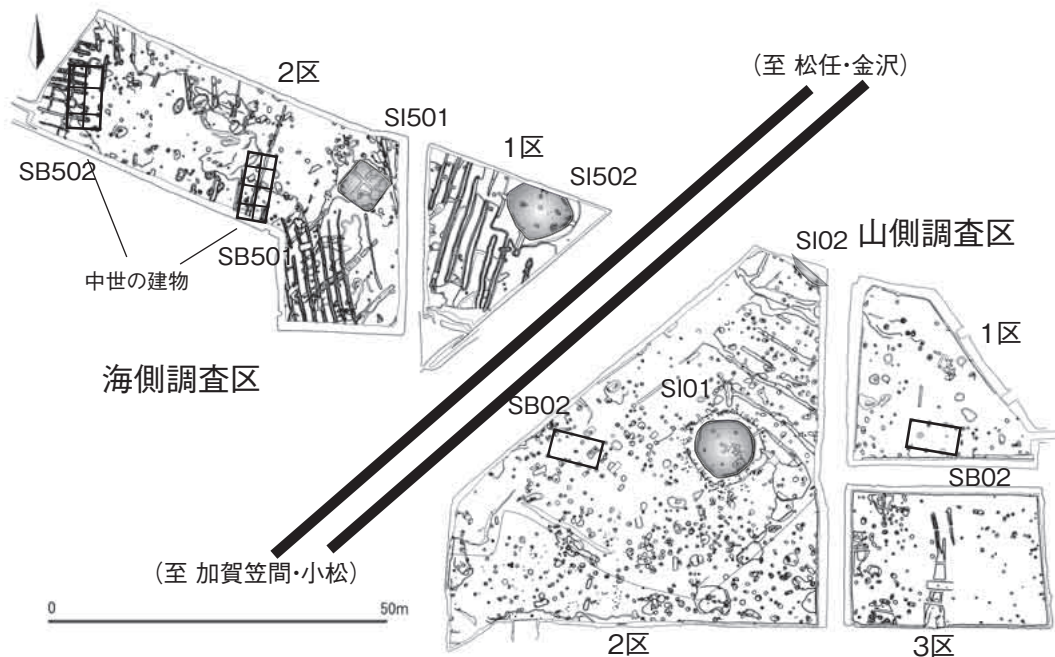
調査成果の要点

- ・弥生時代終末期～古墳時代前期、古代、中世の複合した集落跡を確認した。
- ・弥生時代終末期～古墳時代前期の竪穴建物を4棟、掘立柱建物を2棟確認した。当期の遺構は広範囲に散在する。
- ・中世の掘立柱建物を2棟確認した。当期の遺構は西寄りに散在する
- ・古代と推定される畝溝群を3単位以上検出した。

北安田南遺跡は JR 松任駅と加賀笠間駅の間に位置し、今回が初の発掘調査である。調査原因は北陸新幹線建設によるものであるが、県道改築工事の範囲を含むため今年度の調査区は JR 線を挟んで海側と山側に分かれた。

今回の調査では弥生時代終末期～古墳時代前期の竪穴建物が4棟、掘立柱建物が2棟確認された。建物はそれぞれ30m程度の間隔で点在している。山側調査区で検出された竪穴建物 (SI01) は検出面から床面までの深さが最大で80cmと深く、外縁部に杭痕状の黑色土の凹みが多数認められた。中世の遺構は海側で総柱建物2棟を検出した。畝溝群は中世建物の柱穴に切り込まれることから古代に属することが考えられる。なお、山側調査区南西隅では奈良時代頃の溝状の落ち込みが確認された。

検出された各時代とも、遺構は比較的疎らな状況を呈し、竪穴建物以外からの遺物の出土は概して少なかった。今回の調査結果は各時期における当地の開発の状況を考える上での資料となろう。(浜崎悟司)



調査区概略図



調査地遠景（南東から）



海側調査区



山側調査区



竪穴建物 SI501



竪穴建物 SI01 床面検出状況



掘立柱建物 SB501



竪穴建物 SI01 貼床除去後

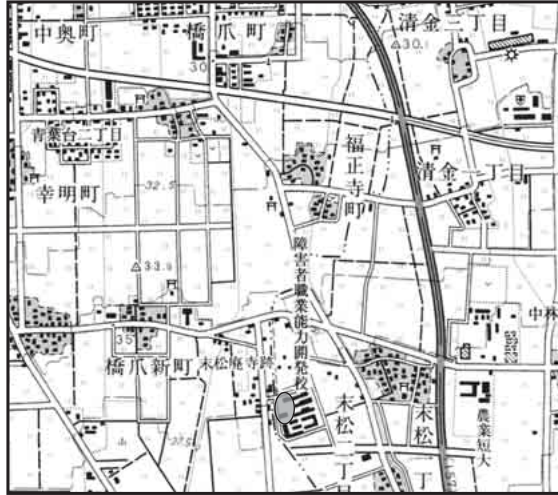
すえ まつ はい じ
末松 廃 寺

所在地 野々市町末松2丁目

調査面積 530㎡

調査期間 平成21年4月17日～同年6月11日

調査担当 端 猛 荒川真希子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

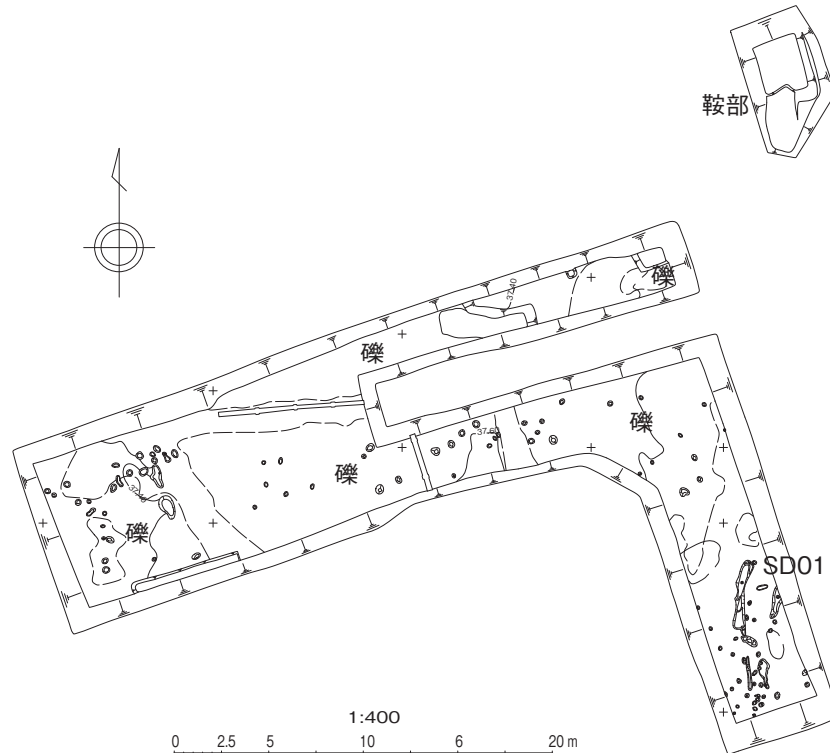
調査成果の要点

- ・ 既往の調査や試掘調査結果と併せ末松廃寺の遺跡範囲を窺い知ることができた。

末松廃寺は、手取川扇状地の標高38m前後の水田地帯に立地する。その中心には国指定史跡「末松廃寺跡」が存在し、今回の調査区はその史跡公園の南側にあたる。周辺では国道157号鶴来バイパスの建設や県立大学の整備、農業基盤整備等により過去に多くの発掘調査が行われている。今回は、石川障害者職業能力開発校実習場等改修工事に伴う発掘調査である。

調査区全域で須恵器や土師器の遺物が出土し、調査区の南側で平安時代の溝と小穴、西側で小穴を検出した。また、調査区の中央付近では礫床を検出しており、その礫床から須恵器の坏と蓋が正位で出土した。礫床直上、耕作土直下からの出土で明確な遺構は検出されなかったが、底部高台内に墨書があり「秋若カ」と判読できた。

なお、調査区の東側で鞍部を確認しており、既往の調査や試掘調査の状況を加味すると北側にある末松廃寺とは鞍部を挟んで南側に新たに遺跡が広がることが確認された。 (端 猛)



調査区全体図 (S=1/400)



調査された末松遺跡群と試掘調査で確認された遺跡の範囲（「末松遺跡群」2000を一部改編）



上空から見た末松廃寺（南から）



調査風景

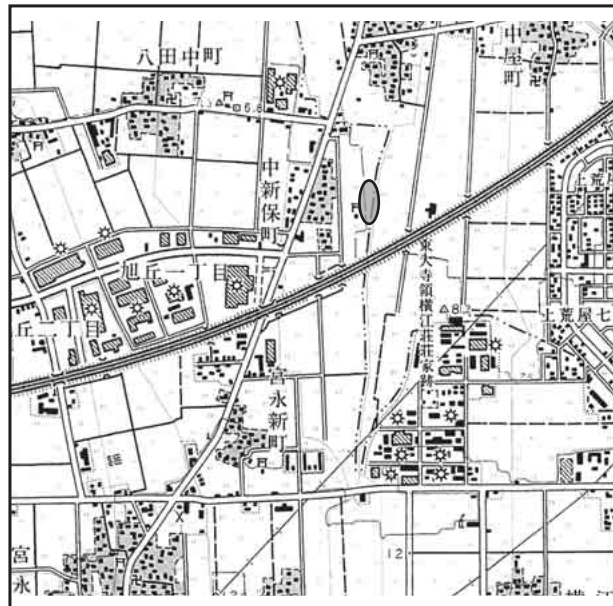
なかしんほ 中新保遺跡

所在地 白山市中新保町

調査面積 675㎡

調査期間 平成21年6月5日～同年7月27日

調査担当 端 猛 荒川真希子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・過年度調査で検出した中世の屋敷地の範囲を確認した。
- ・過年度調査時に検出した断面フラスコ状の土坑を新たに3基確認した。

中新保遺跡は、金沢市との市境に近い白山市域の北部に位置する。手取扇状地の先端部に立地しており、遺跡の東には福増川（中村用水）が流れ、周辺の水田を潤している。調査原因は、金沢外環状道路海側幹線に係る道路建設事業で平成18、20年度に次ぐ調査となる。今回は北陸自動車道に新設される白山IC（仮称）部分が対象となった。

調査では、中世の集落跡を確認した。調査区中央部で掘立柱建物を1棟確認したが、調査区の北部では遺構は少なくなっており、この掘立柱建物を含む南半部が過年度に検出された屋敷地の範囲であると考えられる。

また、調査区の南部では、平成20年度調査で確認された貯蔵穴と推定される断面フラスコ状を呈する土坑をさらに3基確認した。底付近より平安時代の須恵器が出土している。この土坑群はこれで15基となり、弥生時代から古墳時代にかけてのものと平安時代のものと大きく2つのまとまりに分けることができそうである。ただ、自然科学分析等では貯蔵穴とする積極的な成果は得ておらず更なる検討が必要である。

なお、平成18年度の調査で、ほぼ真北に軸をなす溝が確認されており、古代の条里溝との関連性が指摘されている。平成20年度の調査では、南側にその続きを確認し北側は前述の土坑群と錯綜していたものの幅の広い浅い溝を確認している。平成21年度はさらに北側の続きを確認したが、過年度の調

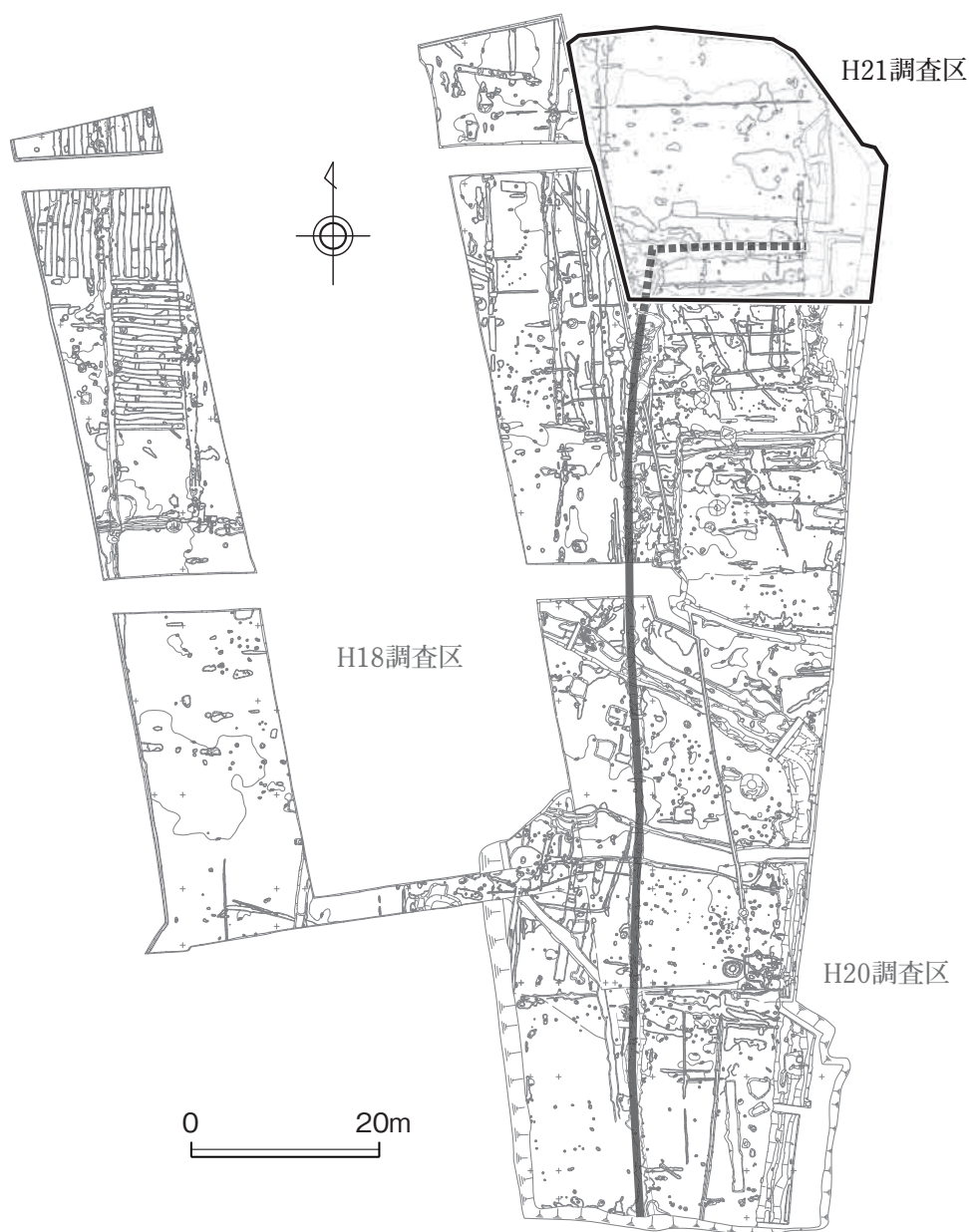


調査風景



断面フラスコ状を呈する土坑

査と合わせほぼ100m分検出した地点で途絶えてしまった。途絶えた地点は、平成20年度と同様に土坑群と錯綜していたものの、そこから東に延びる溝も検出された。調査の所見では、溝は続いており、ほぼ直角に東方向に延びていると判断した。該期の遺構がこの溝以外に検出されないことから、周辺は中世の集落が営まれるまでの間に大規模な削平を受けていることが想像される。周辺の調査成果も合わせ、詳細については更なる検討が必要である。 (端 猛)



中新保遺跡 H18・H20・H21調査区合成図 (S=1/800)

平成21年度上半期の遺物整理作業

国関係調査グループ

上半期は、七尾城跡（七尾市・平成18年度調査）、五歩市遺跡（白山市・平成19年度調査）、白江梯川遺跡（小松市・平成14年度調査）の整理作業を行った。

七尾城跡は、土器の実測・トレースを行った。七尾城跡の実測・トレースは昨年度の下半期にも行っていたので、土師器皿の特徴や、陶磁器の種類が比較的スムーズにできた。

五歩市遺跡は土器、木器、石器、金属の実測・トレース、遺構図トレースを行った。五歩市遺跡は弥生時代後期後半から古墳時代前期および中世の遺跡ということで、久々に完形品に近いものを含む多数の土器を実測することになった。土器は甕、壺、高坏を中心に装飾器台などの器台類、鉢等で中には大型の甕や壺も数点あった。分類・接合を担当していなかったため、器形の推測、調整等の観察に手惑うこともあったが、いろいろな種類の土器を数多く実測したことで充実感がもてる遺跡であった。また、石製品は中世の硯から緑色凝灰岩製の管玉の未製品までとバラエティに富んでおり、特に小さな玉の未製品は観察が大変であった。

上半期の最後は、足掛け3年にわたる白江梯川遺跡遺物整理の最後の木製品の実測・トレースに入った。
(小林多恵子)



七尾城跡の石器実測作業



五歩市遺跡の土器実測作業

県関係調査グループ

今年度上半期に予定していた洗浄は、昨年度調査して出土した遺物である。新幹線建設の五歩市遺跡出土遺物は弥生土器をはじめとして近世までの遺物があり、順調に作業を行うことができた。都市計画道路の五歩市遺跡出土遺物は軟質な弥生土器が多く洗い過ぎないように注意しながらの作業であった。



五歩市遺跡の土器洗浄



五歩市遺跡の土器洗浄

上半期は、金沢城跡・河北門（金沢市・平成20年度調査）の瓦の選別から始まった。釉薬瓦といぶし瓦に分け、軒丸・軒平・丸・平・鬼瓦などに分類した後、刻印にも気をつけて分類ごとに点数を数え、一覧にした後実測を行った。土器では土師器皿や陶磁器の碗、金属では腐食の激しい鋸、楔、ちきりなど、石では白や板石などを実測した。

続く金沢城跡・石川門（金沢市・平成19・20年度調査）では130箱程の記名と並行して建築関係に使われたと思われる石や土器、陶磁器の染付などの実測を行った。

6月に入り加茂遺跡（津幡町・平成17年度調査）の整理作業に入った。須恵器・土師器の墨書では「平」「賀茂」「東」などの文字が底部のみならず側面に書かれているものが多く見られた。墨書椀では内黒ミガキが、びっしり詰まったものも数点あり時間を費やした。全面に漆を施した帯金具や、漆のついた刷毛、表裏全面加工痕の扉など、めずらしい遺物も見ることが出来て、勉強になった。続く小竹へブタB遺跡（中能登町・平成20年度調査）は、短期間の整理作業だったが、珠洲焼の完形の壺の他、甕、土師器皿、陶磁器の皿・碗類、碁石、石臼など、木器では、漆椀、槽、曲物、柱根などバラエティーに富んだ実測を行った。

（山口 桂）



金沢城石川門の遺物実測



加茂遺跡の記名・分類・接合



加茂遺跡の遺物実測



小竹へつり遺跡の遺物実測

特定事業調査グループ

上半期は、二日市町イシバチ遺跡（野々市町、平成20年度調査）、元菊町遺跡（金沢市、平成19年度調査）、乙丸遺跡（金沢市、平成16年度調査）、七尾城跡（七尾市、平成19・20年度調査）の遺物整理作業を行った。

二日市イシバチ遺跡は、パンケース5箱で箱数が少ない割に、縄文から近世までの遺物を満遍無く確認できた。破片は小さい物が多く摩耗が激しく接合に苦労したが記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレースの作業を順調に終えた。

元菊町遺跡は、前年度に記名・分類・接合作業を終えており、今年度は、実測・トレース、遺構図トレースの作業を行った。陶磁器、中でも肥前産陶磁器を中心に、土師器、石製品、金属器と、まさに近世の金沢城下町の一角での庶民の生活を彷彿とさせる遺物であった。特に、全体が楕円状に歪んだ越前焼の大甕は、内面に先人の排泄物と思われる物が、多量に付着していた。著しく歪んだ物でも、商品価値があった当時の営みを思いつつ、別の意味で、実測には注意を要した。と、その時、一瞬、20数年前に元菊町の整理作業に携わった記憶が蘇った。同じ目的で使用された越前焼の大甕を実測していた当時の自分と、現在の自分が重なり、タイムスリップした様な奇妙な空間を感じた。作業は、染付の大皿、展開図を要する物、細密画と、図化に時間を要した。

乙丸遺跡は、パンケース2箱と少量であった。その後に七尾城跡の遺物整理を行った。

七尾城跡は、平成20年度調査の出土遺物の、記名・分類・接合と、平成19年度調査の出土遺物実測・トレースを行った。前者は、後者同様に土師器皿が多かったが、特に、磁器に顕著な違いが見られた。中国の磁器を中心とする後者に対し、前者は、肥前産の磁器が大半を占め、中国産の磁器は、僅かであった。19年度分の土器、木器の実測・トレース、遺構図のトレースを行う中で、土師器皿の成形終了時の手の抜き方に、手法の違いが見られ、注意深く観察しながら作業を進めた。又、墨書の殆どが、土師器皿に書かれており、油煙が付着している物は、判読に困難を要した。 (馬場 正子)



元菊遺跡の遺物実測・トレース



元菊遺跡出土の実測した越前大甕



七尾城跡の遺物の記名・分類・接合



七尾城跡の木器の実測

環日本海交流史研究集会の記録

「日本海域の土器製塩」

はじめに

所長 湯尻修平

当センターの研究事業の一環として平成12年度から開始した「環日本海文化交流史研究事業」は今年度で10年目を迎えることができました。事業の目的は日本海に面した本県の歴史的特徴を理解するために共通の課題を掲げて調査研究を行うと同時に、沿岸各地との交流をはかることにあります。

事業は平成12年度に環日本海交流史の現状と課題をテーマに研究集会を行い、以降毎年集会を行ってきました。平成13年度の「鉄器の導入と社会の変化」や17年度「中世日本海域の土器・陶磁器流通」、18年度「縄文時代の装身具」など適時な研究成果をあげて来ています。これまでの基礎的な研究成果については、本誌の各号にその概要について紹介をしてきているところでもあります。

毎年の研究事業のテーマ設定については、平成18年度から当センターが行う各種講座や体験学習などに関連づけることとしており、平成21年度は「古代の知恵・わざ・こころ」に関係して「日本海域の土器製塩」をテーマといたしました。

今回の集会では主に土器製塩が各地に拡がり地域的特色をみせるようになる古墳時代から終焉をむかえる古代にかけての製塩工程について、主に土器と遺構の検討からその系譜と伝播をさぐることにしました。はじめに総論として能登半島の土器製塩研究の現状と課題について石川県歴史博物館の戸潤幹夫さんに紹介をしていただき、次に南から北へ発表をお願いしました。九州は福岡県糸島市教育委員会の平尾和久さん、山陰は島根県教育委員会増田浩太さん、福井県は福井県教育庁埋蔵文化財センター杉山拓己さん、石川県は当センターの空 良寛さん、富山県は氷見市立博物館の大野 究さん、新潟県は(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団の尾崎高宏さん、東北は秋田県埋蔵文化財センターの柴田陽一郎さんに各地域の実態や調査研究状況についてご報告をいただきました。

これまでの研究から能登地方では製塩土器の形態が脚台→丸底→平底へ変化したと考えられており、平底への変化が八世紀に若狭地方で成立した石敷炉による大型平底容器使用の専業生産を契機として行われるようになったことは既に指摘されていたことでしたが、能登地方及びそれから東への広域的な平底製塩土器の伝播と変化は、今回の研究集会の報告であらためて鮮明にとらえられたと考えております。そして、製塩炉の構造や土器製塩の方法についても本県の七尾市大泊A遺跡の調査成果など新たに議論できる場を提供できたのではないかと考えております。

当センターでは今後ともテーマを変え、「交流史研究集会」の継続開催を進めていく予定ですが、本事業が日本海を媒介とした地域間交流史研究の進展に一定の役割を果たし、本県が持つ歴史的意義の解明に寄与することを願っております。

能登半島における土器製塩研究の課題

戸潤 幹夫（石川県立歴史博物館）

能登半島における土器製塩研究は、1980年代から奈良・平安時代における製塩土器の編年的検討と技術的解明に大きな進捗をみたが、まだ多くの解決すべき基本的な課題が残されている。

まず、土器製塩の開始時期が不明確なことである。能登式製塩土器の最古型式は、大形で高い脚台を有する七尾市祖浜遺跡出土の一群を標式とするが、いまだ発掘調査によった良好な伴出資料に恵まれていない。現在は、月影式併行期の遺跡に出土する例が多いことや、その型式が大阪湾周辺の弥生時代後期に比定される脚台付製塩土器（広瀬Ⅰ式、積山Ⅰ-1式A1類）に類似することから、同期に大阪湾周辺の影響下で成立したとみる説が大勢である。しかし、祖浜型式には大阪湾Ⅰ式に特徴的な器面のタタキ調整が認められず、ナデ調整が普遍的な古墳時代の所産とみる説もある。

こうしたなか、近年、知多湾東岸において、森泰通によって大阪湾岸の脚台Ⅰ式に類するとして「清水式」の存在が知られ、また、その「清水式」にはタタキ調整をもたない在地化した一群（2類）のあることも判明したことから、祖浜型式の系譜については大阪湾周辺にとどまらず東海地域も視野に入れた議論が不可欠となっている。

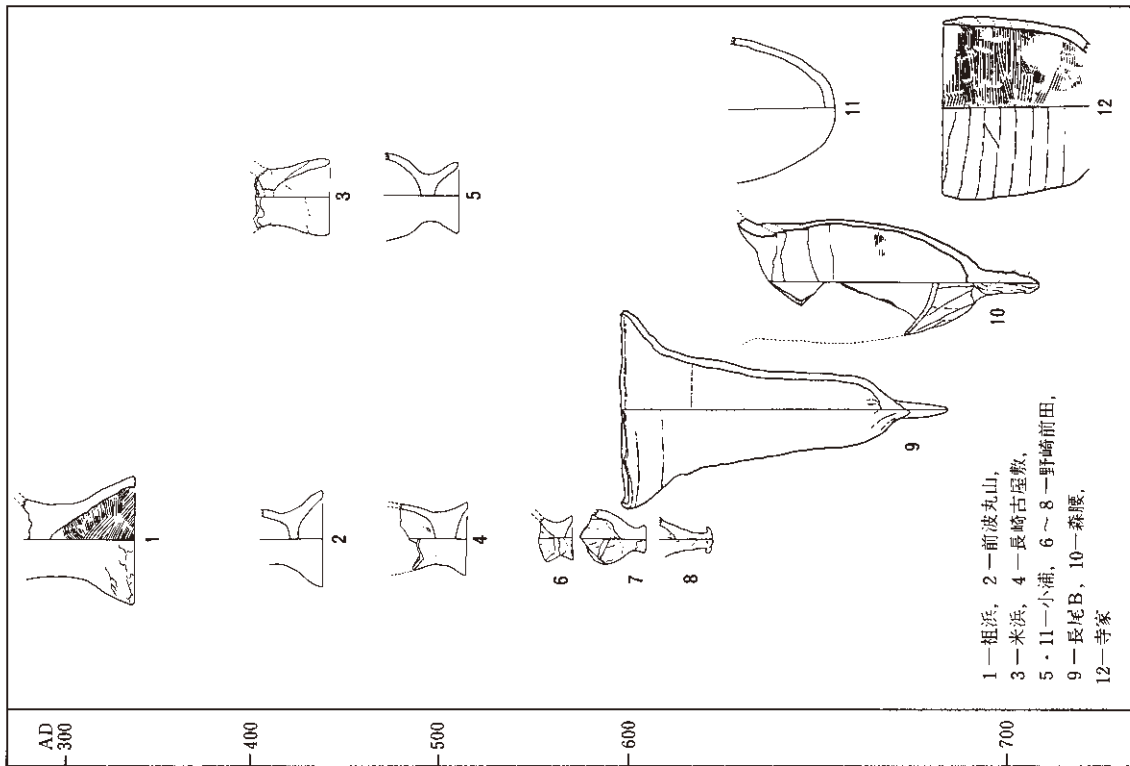
五世紀後半から六世紀の小形脚台付製塩土器の段階では、製塩遺跡の分布が平野の乏しい猫額の地にまで広く拡大し、塩と漁撈を主とした専門的な海人集団の存在が推測される。そうした社会的編成がどのような構造をもって推進されたのか、燃料資源などが競合する他の手工業生産や古墳文化の動態、あるいはその供給を受けていた内陸集団との関係など、総合的な検討がまたれるところである。

その後、脚台付製塩土器は一層の小形化が進み、やがて棒状脚付製塩土器へと独自の変化を遂げたとみられる。しかし、小形脚台式から棒状脚式への変化は、必ずしも半島一円にわたる傾向であったと明言できないようである。外浦沿岸では、古くから丸底形製塩土器の存在が知られ、若狭の影響によって脚台→丸底→平底へと推移したとする仮説があり、内浦沿岸と外浦沿岸との間で地域差の有無が問われている。

律令国家期では、棒状脚付製塩土器による伝統的な土器製塩が命脈を保ちながら、若狭で盛行した大形平底製塩土器による技術が波及・定着した。その背景については、東北経営に関わる軍事塩であったと評価する説が多い。その当否は分からないが、大形平底製塩土器による技術伝播は、若狭の官給塩の生産に倣った律令国家の思惑が少なからず反映しているとみられる。

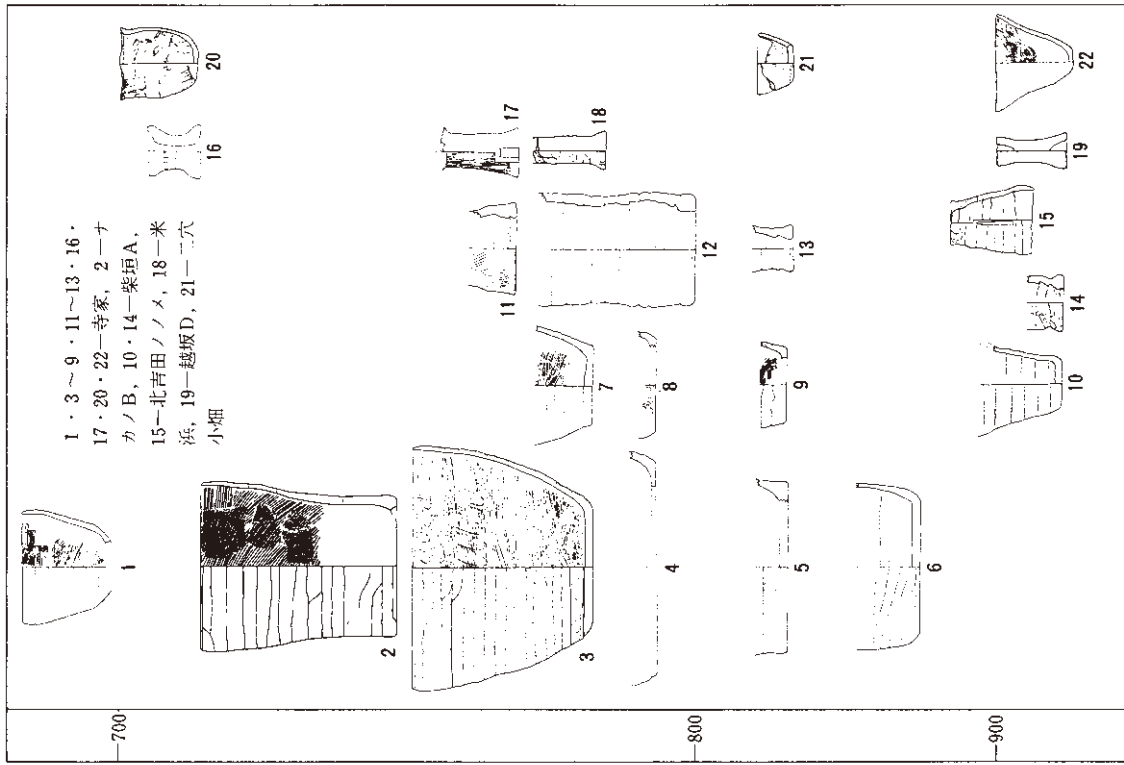
その一方では、若狭的土器製塩が扶植されて間もない8世紀前半の羽咋郡に、塩田（塗浜構造）・鉄釜による製塩が行われていたとする報告がある。塩浜・塩山を占取し、塩釜を所有する先進の塩生産となれば、国衙主導の可能性が高い。となれば、国衙主導のもとで二つの技術体系の異なる塩作りが、互いに圧迫しながら同時に稼働しているという矛盾が浮かび上がってくる。このような矛盾に対しどのような社会を読み取ればよいのか、技術論を含めた再検討が望まれる。

ところで、近年、棒状脚付製塩土器を用いた小規模な製塩工房跡の実例が増えている。それらは十世紀頃まで存続し、多彩な支脚や器台形土製品のほかに、焼けた珪藻土ブロックを伴う例が多い。珪藻土は耐火性に優れていることから炉壁に使われたと考えられが、その構造は明らでない。それは、塩田法による散状塩が主流となるなかで、棒状脚付製塩土器が民需に応えた焼成固形塩用として命脈を保った技術的背景とも絡む問題であり、その考古学的証左となる遺構の検出が期待されている。



能登式製塩土器編年試案1〔1/6〕

橋本澄夫 戸淵幹夫 1994「日本土器製塩研究—石川県—」〔日本土器製塩研究〕



本表は小嶋芳孝「北陸地方の古代製塩土器編年試案」(1988)をもとに抽出・加筆したものの。

能登式製塩土器編年試案2〔1/12〕

弥生V後半			地床 炉
庄内	大阪湾		
布留(古)	I式		
布留(中)			
初期須惠	大阪湾 II式		
TK 208 TK 47			石敷 炉
MT 15 TK 43			
TK 43? ?	大阪湾 III式		

大阪湾沿岸の製塩土器編年

積山 洋 2007「大阪湾沿岸の漁撈・製塩集団と広域交流」『第56回埋蔵文化財研究集会 古墳時代の海人集団を再検討する発表要旨集』

北部九州の土器製塩について

平尾 和久（福岡県糸島市教育委員会）

1. はじめに

北部九州における土器製塩研究は「停滞」ともいえる時代がしばらく続いたが（山崎1994）、近年、沿岸部地域の開発に伴う発掘調査で製塩土器の出土事例が増加し、弥生時代から古代まで土器製塩の概観が可能になった。そこで、本稿では新資料をもとに北部九州製塩土器の特徴をみていく。

2. 北部九州土器製塩のふたつの画期

北部九州における製塩土器の時期的変遷を追っていくと、大きく2つの画期が存在する。それは古墳時代前期の脚台付製塩土器の導入と、8世紀の玄界灘式製塩土器の成立である。

第1の画期は脚台付製塩土器の導入に伴う土器製塩の成立である。北部九州における弥生時代の土器製塩は基本的に日常土器を転用して行われる。製塩に用いられるのは甕で、器表面が剥離したり、白っぽいものが付着する特徴をもつ。これらはいずれも弥生時代中期のものである。これまで確認されている遺跡では備讃瀬戸内でみられる土器の集中は認められず、基本的に小規模な製塩であったと考えられる。なお、弥生時代後期になると出土事例がほとんどなくなり、不鮮明な状況となる。

そのような中、古墳時代にはいと、再び土器製塩が確認される。しかも、古墳時代前期の製塩土器は備讃瀬戸内に系譜をもつ製塩専用の土器であり、ここに北部九州の土器製塩の本格的な成立が認められる。また、福岡市今宿遺跡や今山遺跡では多量の製塩土器が出土しており、自家消費的なものとは異なる大規模な製塩といえ、画期が設定できる。

第2の画期は玄界灘式製塩土器の成立と機能分化である。古墳時代までは煎熬と焼塩をおなじ製塩土器で行っていた。しかし、8世紀になると用途に応じた製塩土器が出現する。煎熬用の玄界灘式製塩土器と焼塩壺である。玄界灘式製塩土器は古墳時代の長脚化する製塩土器と形態が全く異なり、分布域も大きく変化することから、土器製塩に関する大きな発想の転換が認められるが（山崎1994）、大阪府阪南市田山遺跡でも煎熬用と焼塩用の土器が分化しており、大阪湾岸地域と北部九州で共通した現象がみられる（岸本1998）。なお、奈良時代の玄界灘式製塩土器はすでに形態が完成したものとなっており、その祖形は古墳時代までさかのぼる可能性も指摘されている（山崎1994）。

3. おわりに


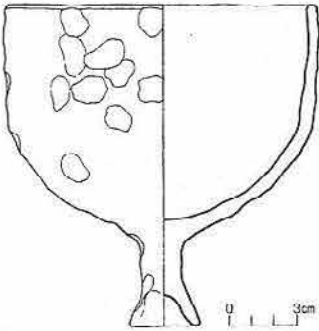
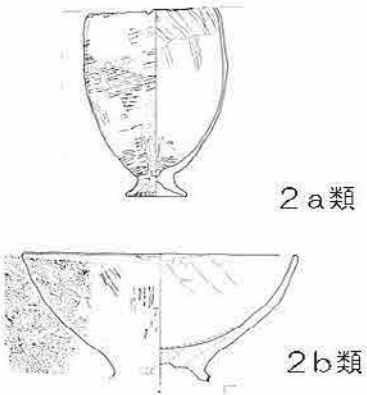
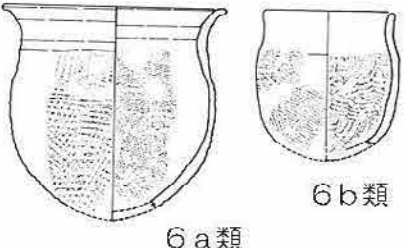
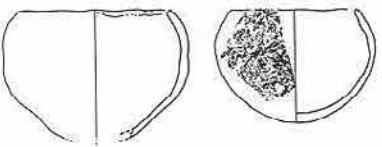
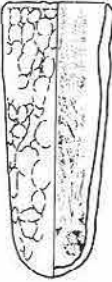
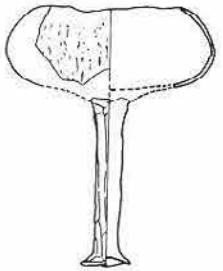
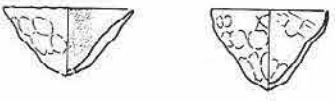
北部九州における土器製塩研究は近年の調査の進展により、研究環境が整いつつあると個人的には考えている。これまで資料的な制約からアプローチできなかった課題も多く存在しており、今後の研究の活性化に期待される。

最後に発表の機会ならびに本稿執筆の機会を与えていただいた（財）石川県埋蔵文化財センターの皆様にお礼申し上げます。

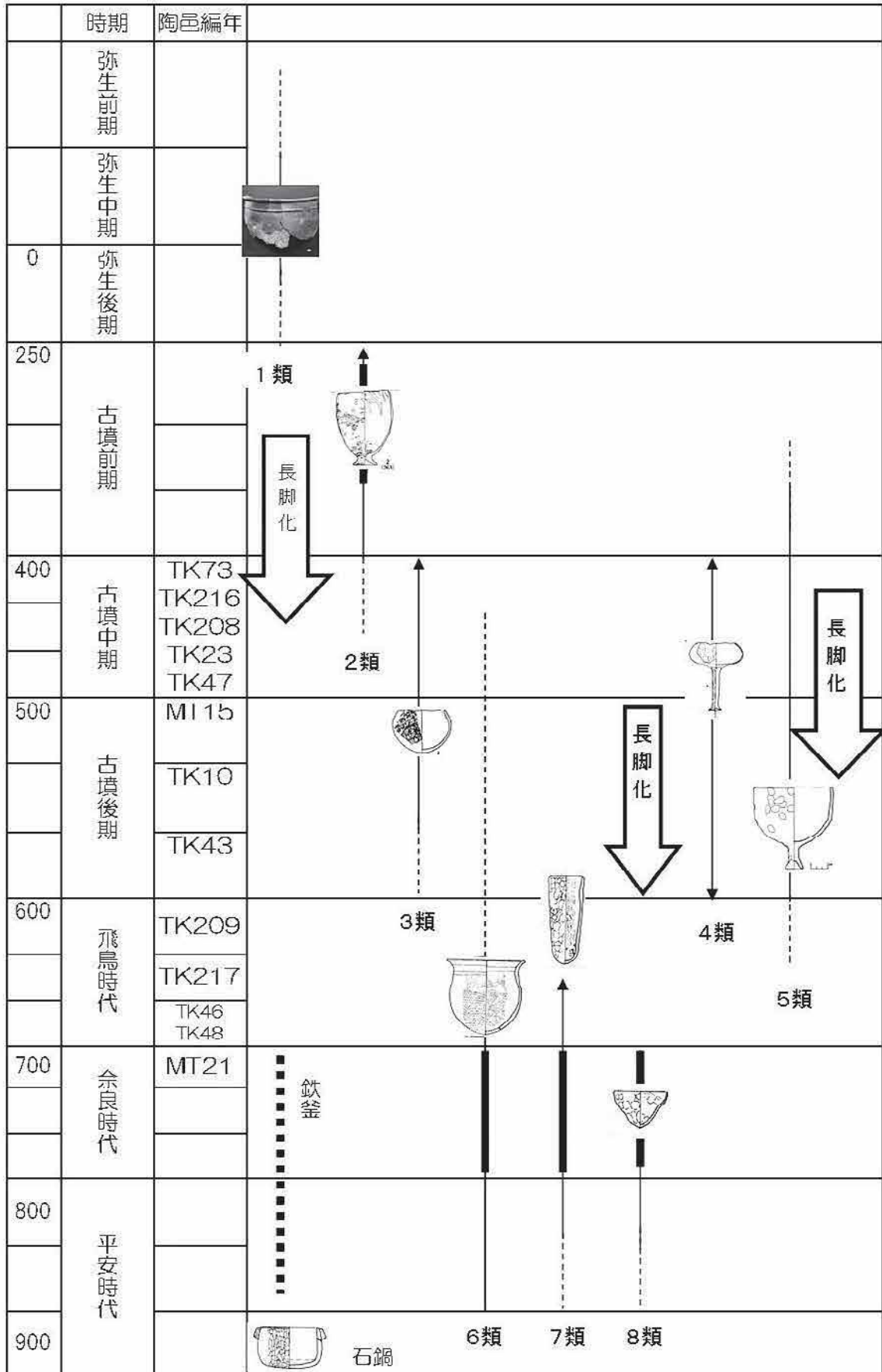
【参考文献】多くの文献があるが、紙幅の関係で大部分を省略している。

岸本雅敏 1998「古代国家と塩の流通」『古代史の論点』3 都市と工業と流通 小学館

山崎純男 1994「福岡県」『日本土器製塩研究』青木書店

1類		5類	
2類		6類	
3類		7類	
4類		8類	

第1図 製塩土器分類図



第2図 北部九州製塩土器編年表

山陰地域における土器製塩とその系譜

増田 浩太（島根県古代文化センター）

土器製塩の変遷

山陰地域における土器製塩の初現は、3世紀後半とされている。明確な製塩遺構は皆無であり、散見される製塩土器の存在をもってのみ、その様子を知ることができる。山陰西部では、島根県安来市の柳遺跡出土低脚付土器が、被熱による表面の剥離の様子から製塩土器と想定される。形態的に備讃瀬戸地域、あるいは玄界灘沿岸の北部九州地域との関係を指摘する研究者もあるが、後続する資料が今のところ皆無であり、定着した様子うかがえない。一方山陰東部では、鳥取県湯梨浜町の長瀬高浜遺跡出土製塩土器が著名である。平底コップ形の特徴的な土器で、資料数は少ないものの5世紀代まで因幡・東伯耆地域で用いられている。この特異な形状の製塩土器は、全国的にも類似例が無く、その出自も定かでない。両者の分布域は大山北麓を境界として、東西に明瞭に分かれる。

5世紀以降、山陰地域の製塩土器は、脚台部の径をすぼめながら長脚化していく。製塩遺構の検出が皆無であるため、現時点では周防や北部九州の製塩土器編年を時間軸に援用せざるを得ない点に危うさがあるが、島根県松江市郷の坪遺跡や伊屋谷遺跡出土土器に見られるように、低脚から棒状脚への変化は明白である。山陰東部では、現時点で長脚化した製塩土器の出土はないが、平底コップ形から扁平な低脚を持つワイングラス形に移行する様子うかがえる。山陰西部の変遷と同じ動きと捉えることも可能であろう。

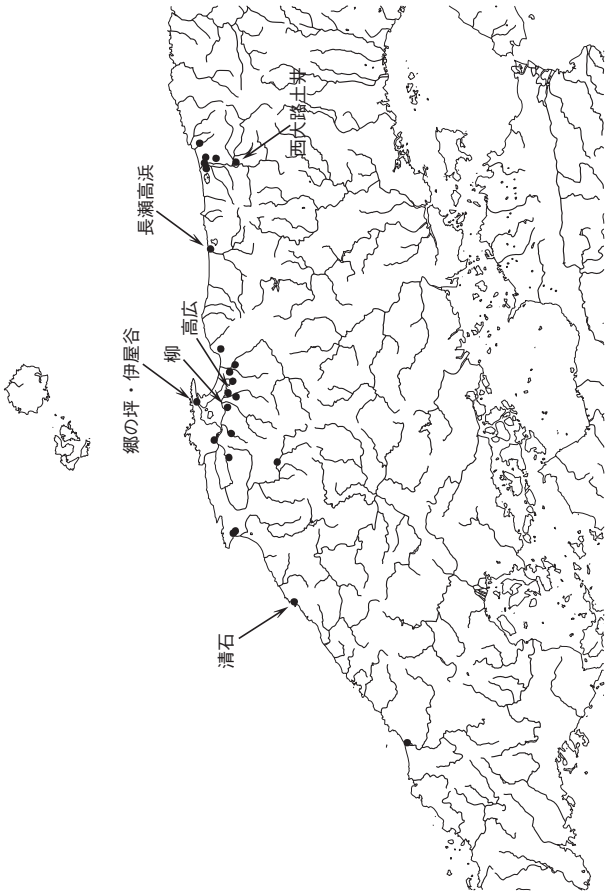
7世紀中葉になると、鹿蔵山式と称する尖底碗形の製塩土器が出現するが、出土例は少ない。山陰地域は、若狭・能登のような塩貢進国でないこともあり、律令体制後も生産遺跡や生産量が著しく増大した様子はない。この時期では、北部九州地域を中心に採用された玄界灘式と呼ばれる土器も出土している。玄界灘式の甕は煎熬工程に特化した土器であり、山陰地域もまた「煎熬土器」と「焼塩壺」を併用する時代に入ったことがうかがわれる。現状では出土例、地域とも限られるが、一般に常用される甕を転用する方法で、これに代えていた可能性が高い。焼塩壺としては砲弾形の六連式が広く用いられるが、内面の布目痕の有無など若干の差異が認められる。出雲平野部の出土例から、土器製塩は8世紀中葉前後まで行われていたことが確実だが、他地域と同様、徐々に鉄鍋等に転換していったと考えられる。

製塩土器の分布と塩の流通

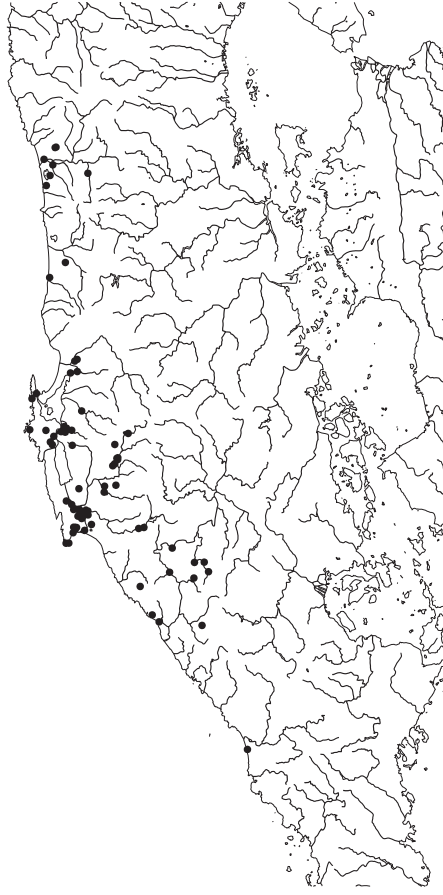
製塩土器は、山陰地域全般の沿岸部に分布する。遺構の検出例はないが、古墳時代までの出土遺跡は大半が海岸線もしくは河口付近から1～2km圏内に分布し、小規模ながら生産を手がけていた遺跡が多く含まれると判断される。当時の首長墓の分布や、日常使用される煮焚具の使用領域などを考慮すれば、生産された塩の流通圏がそれ以上に広域であったとは考えがたい。7世紀中葉以降では、官衙、寺院等からの焼塩壺の出土が増え、内陸部の集落にも分布域が広がる。公的施設と集落では、塩自体の持つ意味合いが異なると考えられるが、律令体制下における、より広範に展開する流通機構の一端を垣間見ることができる。

他地域との技術的交流

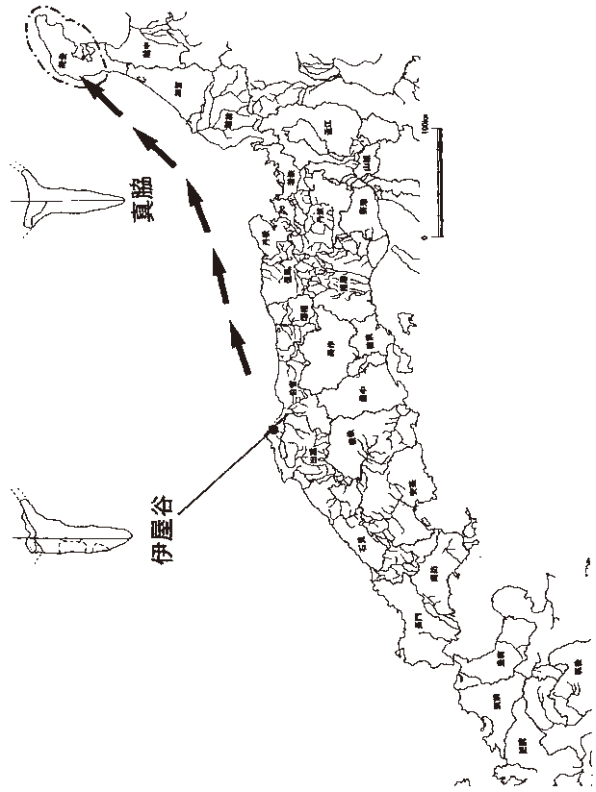
既に記したとおり、土器製塩は備讃瀬戸地域もしくは北部九州地域の影響をもって導入されたと考えられる。また5世紀から7世紀にかけての長脚化は、能登地域・知多地域のそれと類似する点が既に指摘されている。山陰地域の製塩土器編年自体、時間軸に関し曖昧な点が残るため、相互の前後関係や伝播経路を語ることは容易でない。しかし、但馬地域の宇川式製塩土器や前記の玄界灘式土器など、山陰地域の製塩土器が周辺地域の影響を断続的に受けながら変遷してきたことは間違いない。現時点で相互の直接的な影響を捉えることは難しい。とはいえ生産量、作業効率に直結する技術的創意工夫は、モノの流通よりも容易く地域の垣根を飛び越えていくのかもしれない。



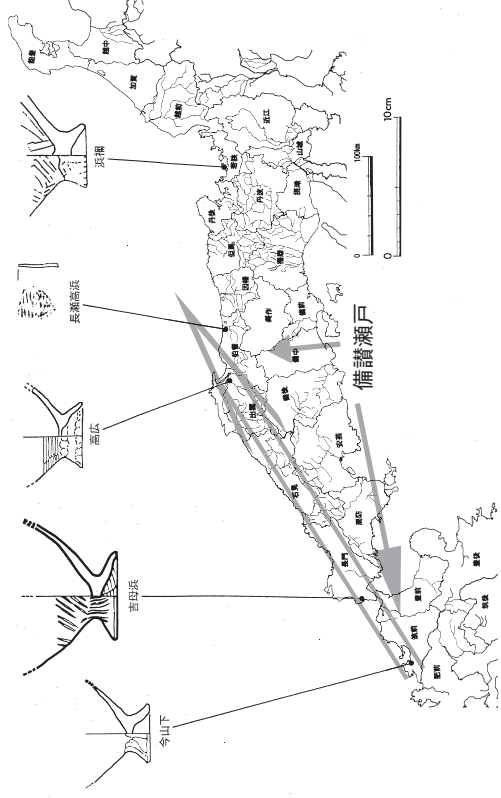
弥生、古墳時代における製塩土器の出土遺跡



律令期における製塩土器の出土遺跡

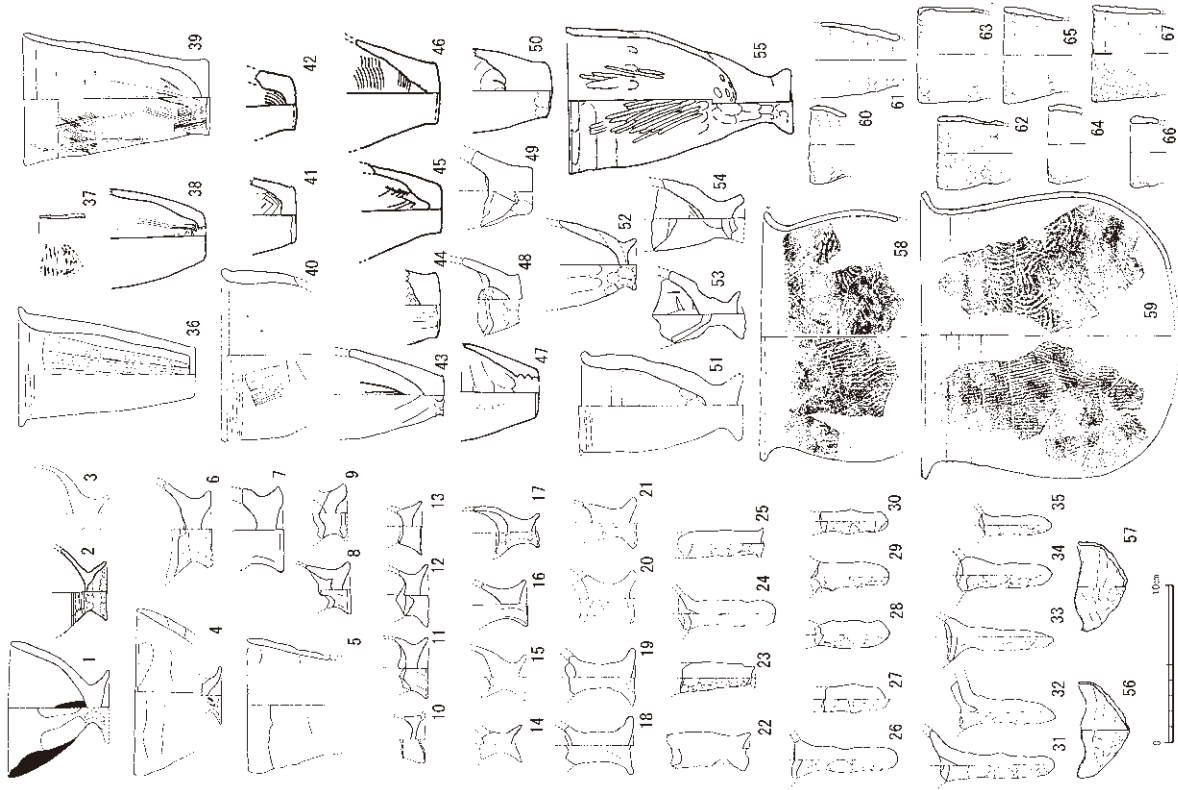


山陰地域と能登との関係（7世紀）（飛田 2002）



山陰地域への初期製塩土器の伝播経路（飛田 2002を改変）

	固防 (美濃ヶ浜式土器)	西山陰 (郷の坪式土器)	東山陰 (長瀬高浜式と宇川型)
250			長瀬高浜式
300			
350			
400			
450		郷の坪式	宇川型
500			
550			
600			
650		鹿蔵山式	
700	玄界灘式		六連式
800			



1: 柳 2: 高広 3: 清石 4/5: 前田 6~9/11~17/20/21/25: 郷の坪 10/22~24・26~35: 伊屋谷
 18/19: 出雲大社境内 36/37: 長瀬高浜 38/41/44/47/48/50: 円護寺坂/下 39/43/55: 西大路土居
 40/42/45/46/61/62: 栗谷 49/51: 大谷第1 52: 秋里 53/54: 長砂第3 56/57/66/67: 鹿蔵山
 58: 郷上 59: 野田西 62: 忌部 63: 出雲国分尼寺 64/65: カネツキ免

若狭湾沿岸の土器製塩

杉山 拓己（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

若狭地方における土器製塩は1958年から同志社大学がおおい町大島半島を対象として行った調査の報告書『若狭大飯』でまとめられ、以降の研究はこれを発展・継承する形で行われてきた。近年では製塩遺跡の調査事例が減少しているが、京都府舞鶴市浦入遺跡において若狭と類似する土器製塩の詳細が把握された結果、従来の編年に対して問題点も指摘されている。

現状での課題として挙げられるのは、まず旧来の製塩土器編年の修正の必要性であるが、各型式間の系統の交代や時間的間隙の有無、土器製塩を取り巻く背景の変化の検討も十分とはいえない。

既往の研究をふまえ、若狭地方の製塩土器における器形の消長を時間軸上に整理すれば、図6のようになる。これらは以下のとおり6つの段階に区分できる。

1段階：コップ形脚台付容器からなる。石敷炉は確認できず、粘土床をもつ土坑状の炉跡1例のみが確認されている。従来の浜瀬Ⅰ式。4世紀後半から5世紀前半頃と考えられる。

2段階：コップ形丸底容器からなる。石敷炉も確認できる。従来の浜瀬ⅡA式。5世紀の後半から6世紀の前半にあたる。

3段階：鉢形の丸底容器のみが使用される段階。やや大きめの石を敷き詰めた炉跡が確認できる。従来の浜瀬ⅡB式。6世紀末を上限として7世紀を主体とする。古墳から出土する例もある。

4段階：大形平底容器が出現。従来は平底容器のみからなる船岡式として理解されてきたが、低い支脚と鉢形丸底容器が確実に存在する。7世紀末を上限とし、8世紀が主体となる。船岡遺跡では長方形の石敷炉が多数確認されている。

5段階：鉢形と壺形の丸底容器、支脚からなる。従来の吉見浜式。10世紀を中心とすると考えられる。この時期以降炉の石の敷き方が粗くなっていく。

6段階：支脚が長大化し、小形のコップ形容器が伴う。従来の塩浜式と浦入O-2地点式にあたる。12世紀後半を下限とする。支脚の伸長の度合いから細分できるが、資料が少ないので一括する。

1・2段階は土器の系統の交代がみられるものの大阪湾沿岸での変化と一致するため、連続した技術移入が想定できる。なお同時期には丹後の平遺跡でコップ形の脚台付容器が確認され（図5）、山陰や能登との関係で注目される。

この時期は大型古墳の築造開始とも近接するため畿内勢力との政治的関係が背景として想定されてきた。消費の様相は不明であるものの、製塩遺跡では刀剣装具を初めとする各種骨角器の生産も認められ、多様な生産活動の一環として製塩が行われていることも波及元のあり方と一致している。

3段階になると製塩遺跡から各種の遺物は出土せず、生産活動は製塩に単純化している可能性が高い。こうした集約的な状況への移行は、土器の容量や形態が類似している備讃瀬戸地域で想定されている変化と同様である。

4段階は従来から若狭の土器製塩の盛行期とされ、都城出土木簡からは若狭が調塩供給地として卓越していたことがわかっている。従来の理解とは異なり複数器種の共存期としたが、今後これらの使い分けと生産のあり方との関係についての実態を検討していく必要がある。なお越前地方において土器製塩が明確となるのもこの時期以降である。

若狭では平底容器は大型のもののみで終わり、支脚が長大化して以降は遺跡数も減少する（5・6段階）。これまでは調庸制の衰退や国衙支配の強化と関連付けられていたが、近年下限年代はさらに下方修正されている。中世への社会変化の中に土器製塩の変質を位置づけていく必要があるだろう。

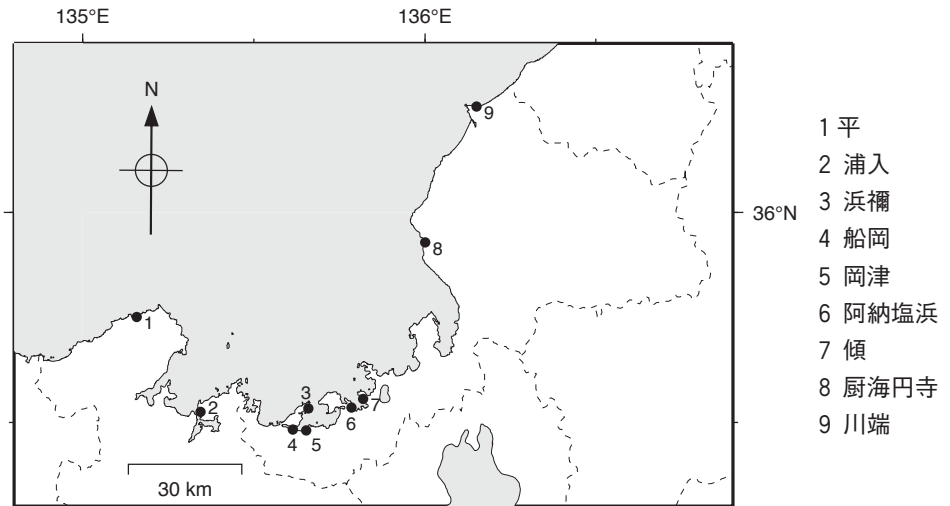


図1 主要遺跡位置図

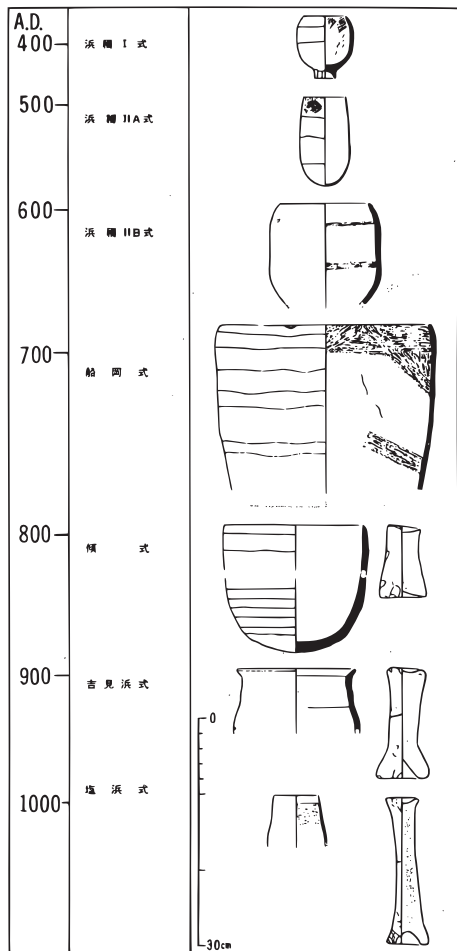


図2 従来の若狭地方製塩土器編年

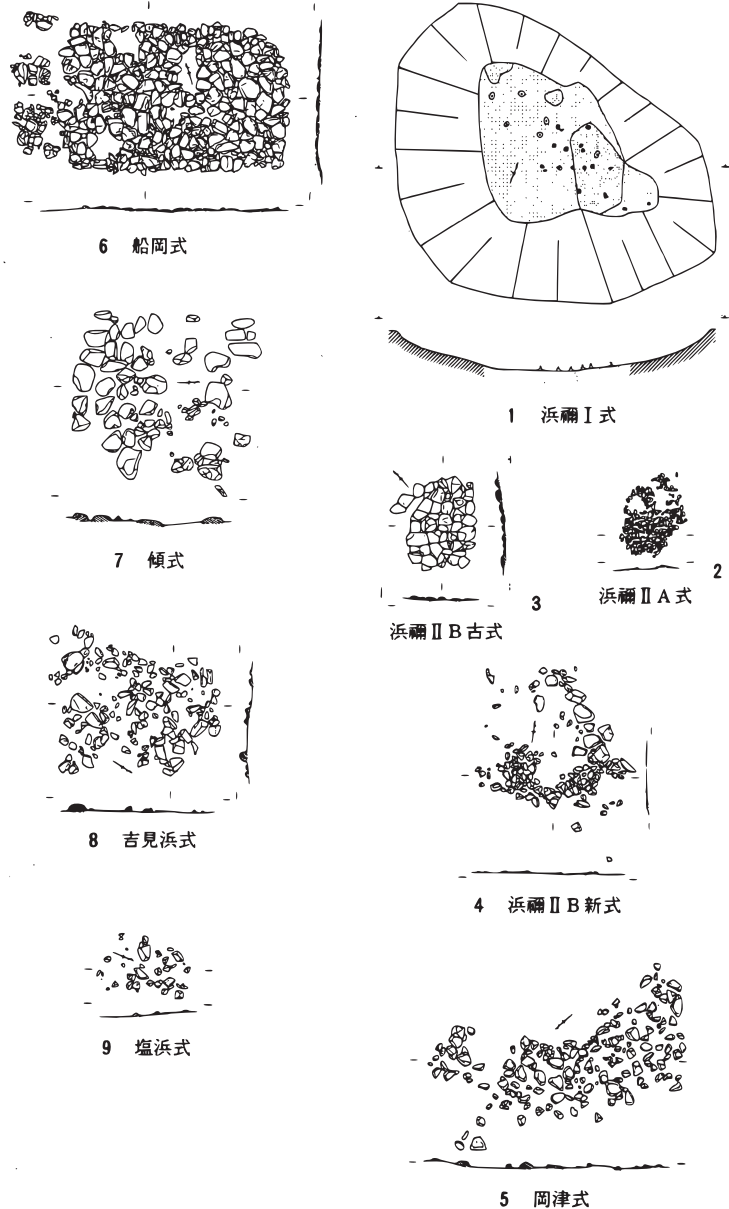


図3 製塩炉跡の編年（縮尺：約1/100）

【出典】図2:大森宏・森川昌和 1978「若狭の土器製塩」『考古学雑誌』第64巻第2号。図3:大森宏・森川昌和 1994「福井県(若狭)」『日本土器製塩研究』青木書店。

期	土器形式	遠 敷 郡 (小丹生詳)			三 方 郡 (三方詳)	
		遺跡数	10	20	10	20
I期	浜欄1式	1			1	
II期	浜欄2A式	1	1		1	
III期	浜欄2B式	1	1	1	1	
IV期	輪岡式	1	1	1	1	1
V期	楯式	1			1	
VI期	吉見浜式	1			1	
VII期	塩浜式	1			1	
藤原宮 平城宮	塩付柱本脚 出土点数	1	1	1	1	1

図4 若狭地方土器製塩遺跡数の推移

【出典】図4:岸本雅敏 1992『律令制下の塩生産』『考古学研究』第39巻第2号。図5:河野一隆 1997『丹後半島最古の製塩土器』『京都府埋蔵文化財情報』第63号。図6:前掲大森・森川 1994, 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001『浦入遺跡群』、同志社大学文学部 1966『若狭大飯』をもとに筆者作図。

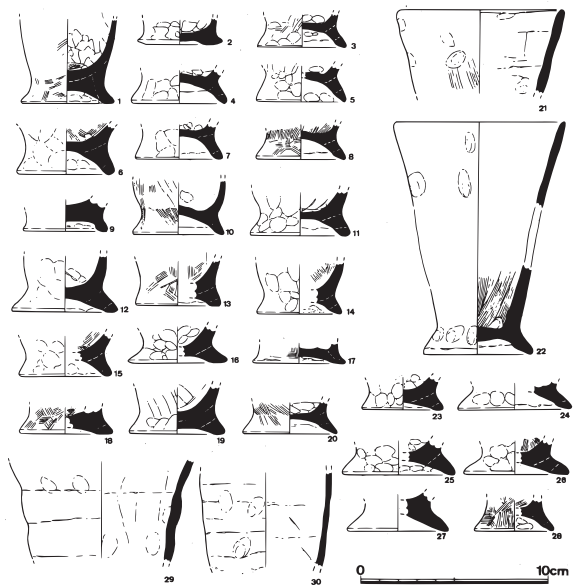


図5 京丹後市平遺跡出土土川型製塩土器

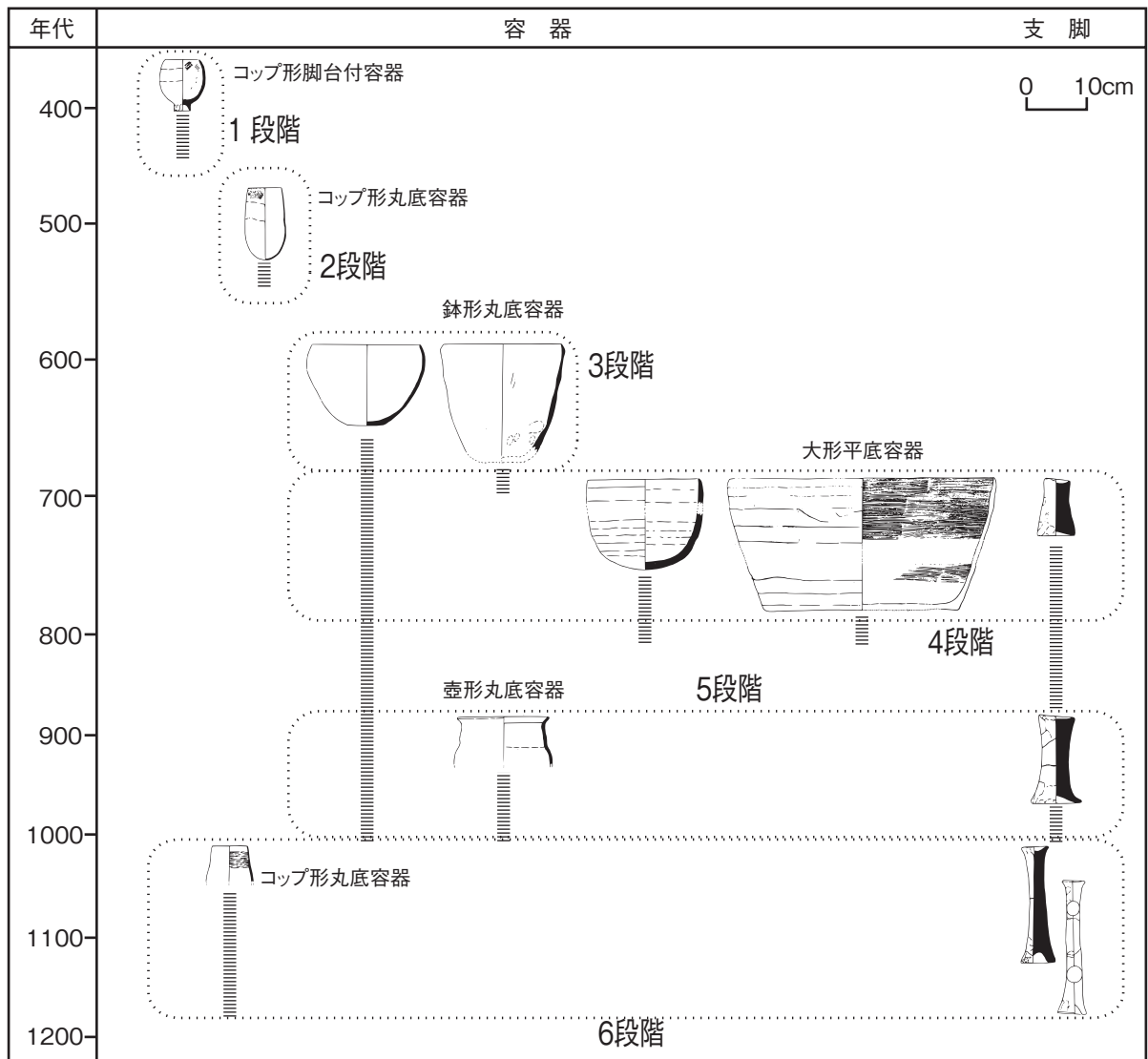


図6 若狭地方製塩土器編年試案 (縮尺: 1/12)

能登地方の土器製塩遺跡

空 良寛（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

1. はじめに

能登地方では土器製塩を行っていた遺跡が内陸部を除くほぼ全域に分布している。遺跡の数は現在200以上といわれているが、発掘調査の実施された遺跡はそのなかの一部で、詳細の知られていない遺跡も多い。ここでは、近年の調査成果を中心に能登地方の土器製塩遺跡の現状を紹介したい。

2. 近年の調査成果と棒状尖底土器

90年代以降の調査では、内浦地域を中心に多くの遺跡から棒状尖底の製塩土器が出土しており、8世紀以降に外浦地域から広がりをもせる平底の製塩土器との関連が注目されている。また、製塩遺構が見つかる調査事例も増加しており、土器製塩の作業工程を考える上でも重要な視点を与えている。

棒状尖底の製塩土器に関しては、能登町真脇製塩遺跡や七尾市中島町のヤトン谷内遺跡から10世紀代の製品が出土しており、平底の製塩土器との併用が確認されている。また、真脇製塩遺跡では10世紀後半になると平底の製塩土器だけが残るようである。なお、分布状況の新知見として、能登半島の最先端部珠洲市大谷中学校東遺跡から8世紀頃の棒状尖底の製塩土器が見つかった。

製塩遺構に関しても近年の調査で様々な発見がなされている。大谷中学校東遺跡では「コ」の字状の区画溝に囲まれた中に炉跡が検出されている。その上層では粘性土を貼った層が見られ、簡易的な塩田が営まれていたと考えられる。真脇製塩遺跡では9世紀末から10世紀後半ころの自然石を配した製塩炉が見つかった。七尾市三室トリ A 遺跡では10世紀前半頃の棒状尖底の製塩土器と平底、丸底の製塩土器、支脚が併用されており、被熱した珪藻土塊が見つかった。また、七尾市の富山湾側の最南端に位置する大泊 A 遺跡からは様々な種類の製塩炉が見つかった。大きく分けると2種類で正方形のものと楕円形のものである。正方形の製塩炉は一辺1m～1.2m、深さは10～20cmで、遺構は細かく割れた製塩土器片と炭、灰を含む黒い土で埋まっている。楕円形のもの長辺が2m前後で深さが30～40cmのすり鉢状になっている。被熱した珪藻土ブロックを配したもの、玉砂利を敷き詰めたものなどが見つかった。楕円形の炉では製塩土器がほとんど出土しておらず用途は不明である。

3. まとめ

以上の調査成果から内浦地域では10世紀頃まで棒状尖底の製塩土器と丸底、平底の製塩土器と支脚がセットになったものが並行して使用されていたと推測される。また製塩炉も珪藻土を配した炉跡とともに様々な形態の製塩炉が使われていた可能性があり、能登地方独自の土器製塩の変遷が解明されつつある。今後、製塩土器や製塩遺構などから生産体制などについて究明していくことが課題である。

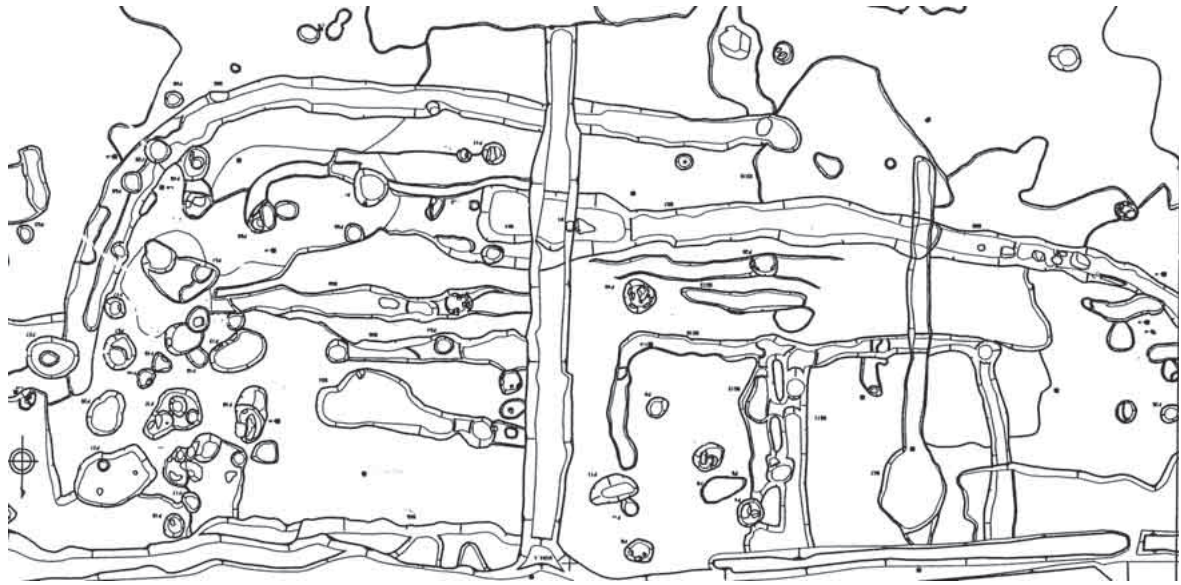


図1 大谷中学校東遺跡 溝に囲まれた製塩炉

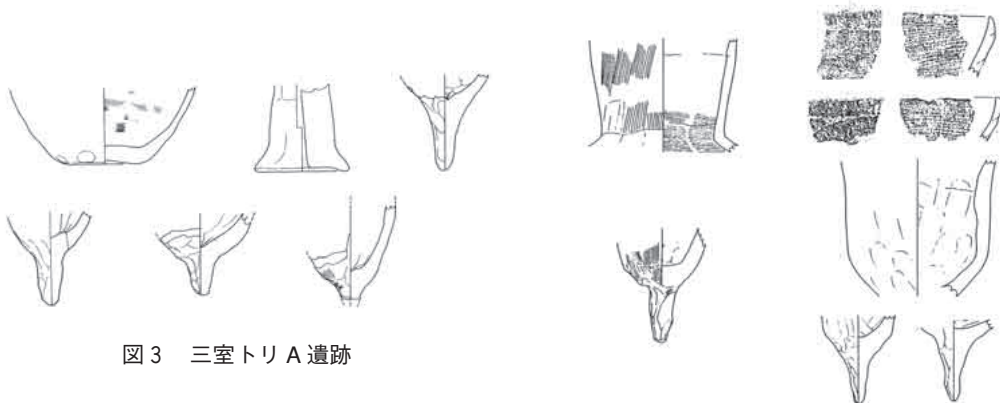
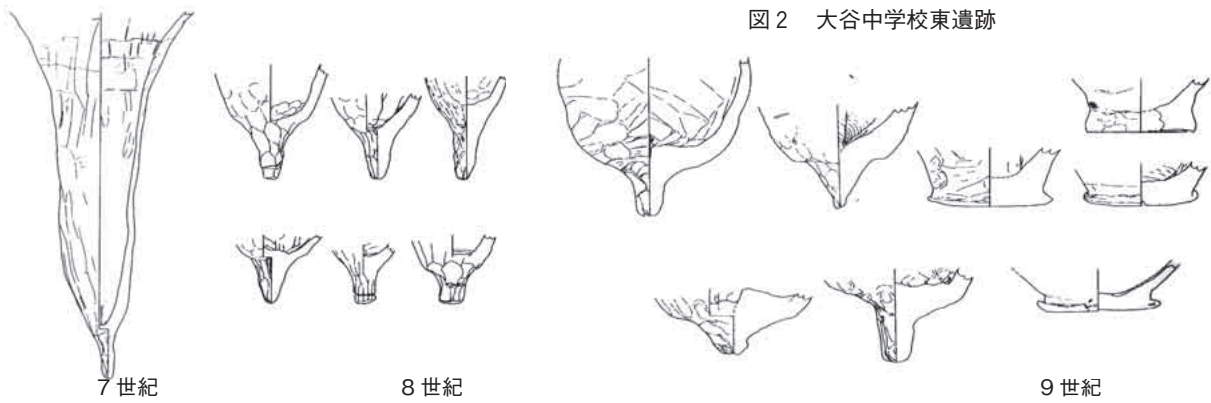


図3 三室トリA遺跡

図2 大谷中学校東遺跡

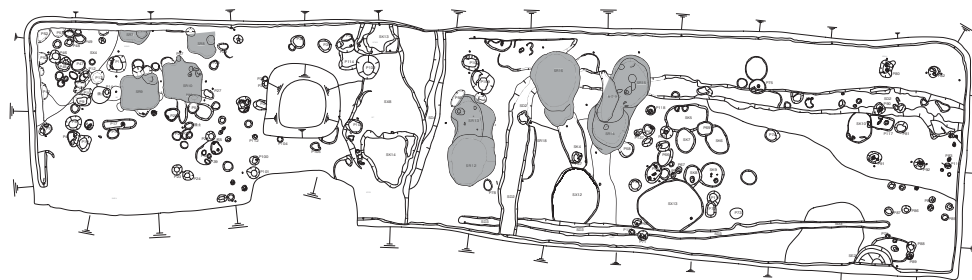


7世紀

8世紀

9世紀

図4 鶺鴒島遺跡



● 製塩炉

図5 大泊A遺跡 S=1/300

土器 S=1/6

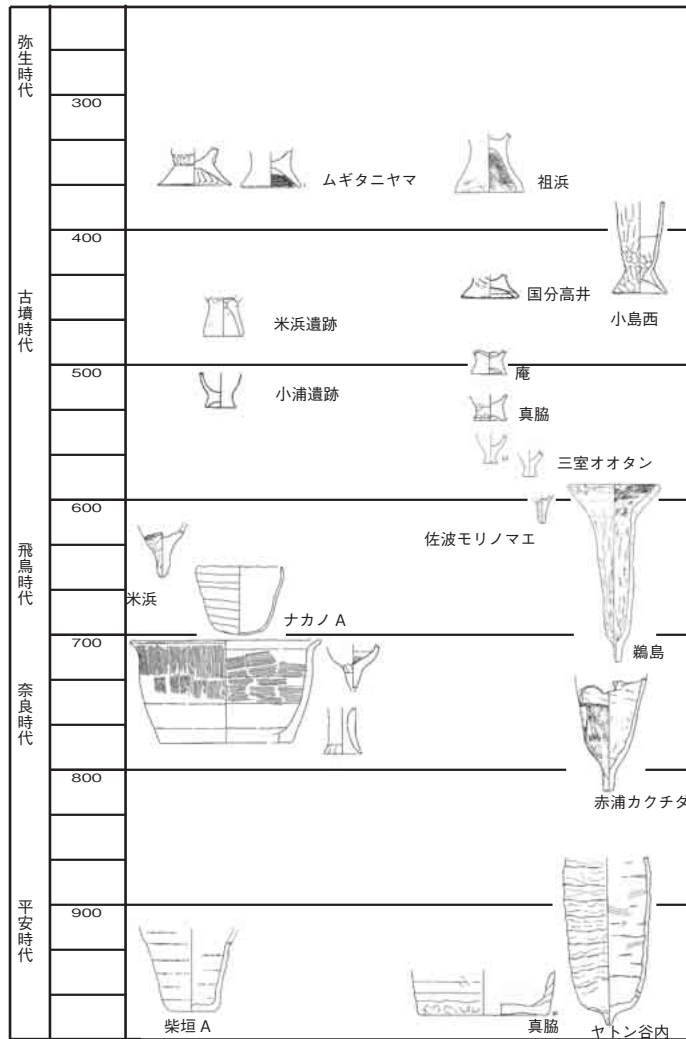


図9 製塩土器編年表 S=1/12

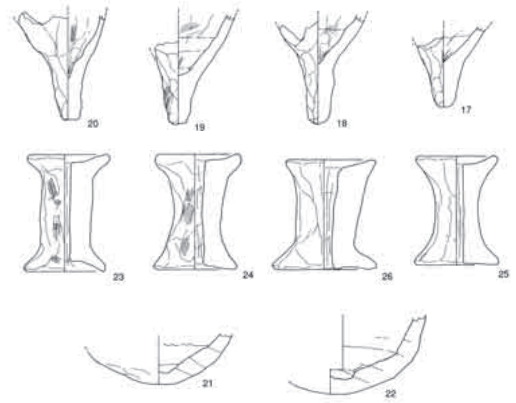


図6 三室トリA遺跡

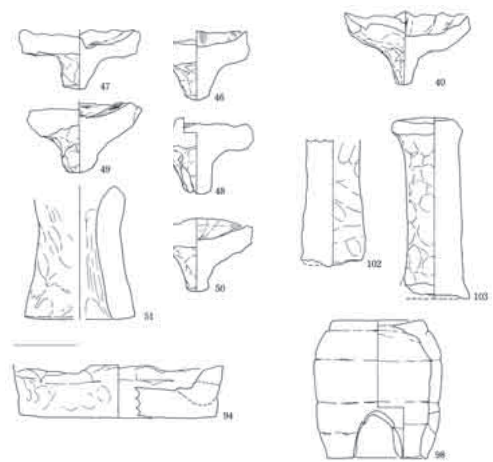


図7 真脇製塩遺跡

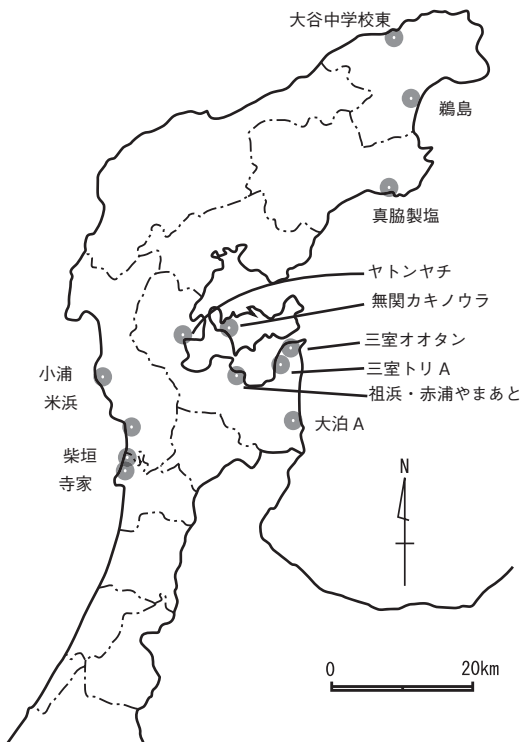


図10 能登半島の主な製塩遺跡

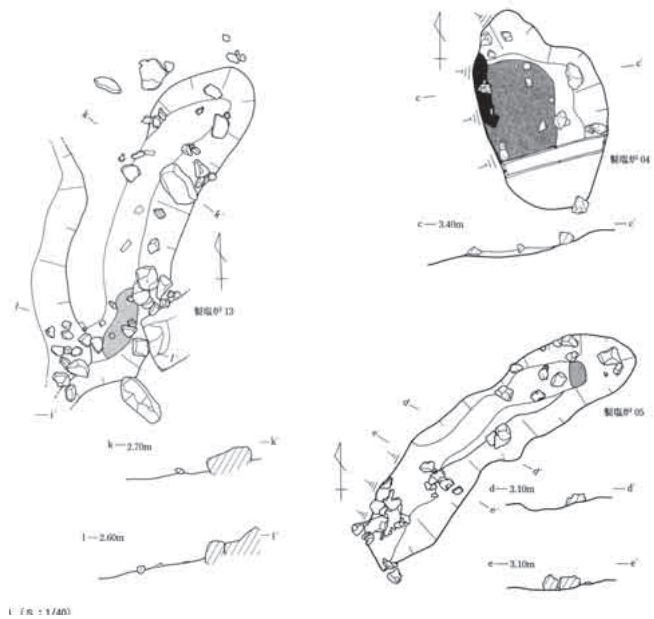


図8 真脇製塩遺跡配石炉 S=1/120

富山県の土器製塩

大野 究（氷見市立博物館）

昭和49年の九殿浜遺跡発掘調査以降本格化した富山県の土器製塩研究であるが、現段階で製塩土器が出土する遺跡は59ヶ所にのぼる。

分布状況を見ると、海岸沿いでは氷見市と朝日町に集中する。両地域は海岸近くに丘陵がせまる地形であり、燃料の薪を得やすい立地である。内陸部では富山平野と砺波平野全域に分布し、小矢部川流域には海岸部から30km以上、標高100mをこえる例もある。

5世紀末から6世紀前半にかけて、脚台製塩土器が氷見海岸沿いに点在しており、これらが富山県における製塩土器初出の一群である。能登地域からの導入と考えられる。

6世紀末から7世紀末までは、棒状尖底製塩土器が多く分布する。海岸沿いでは氷見海岸にほぼ集中しており、生産地はこの辺りと推定される。製塩土器の分布は県内一円の内陸部にまで広がっており、生産・流通の管理を氷見地域の集団が担っていた可能性がある。

なお、九殿浜遺跡にわずかに丸底製塩土器があるが、能登地域と同様に一時期の中間的な役割を果たした特殊な形態と理解しておきたい。

8世紀も棒状尖底製塩土器が存続するが、この時期の類例は少ない。平底製塩土器は8世紀後半には導入されているが、やはり類例が少ない。

9世紀から10世紀にかけては、棒状尖底製塩土器と平底製塩土器が併存する。棒状尖底は、短脚大型のものが主体となる。また10世紀には平底に口縁部が外反するタイプが出現する。棒状尖底は10世紀後半には姿を消すようである。

11世紀以降は平底製塩土器が主体となり、中世初めの12世紀後半まで続く。

なお土器編年案には掲載しなかったが、10世紀以降県東部海岸沿いには円筒型土製品や支脚が加わっている。

県内の製塩土器出土例は徐々に増加しているが、ほとんどは少量の破片出土であり、製塩関連の遺構に伴う例も少ない。現段階で確実に製塩炉と考えられるのは境関跡の一例のみであり、これは20～40cmの扁平な自然礫を壁面に用いて構築した3.5×3.5mの隅丸方形のものである。この他では焼土遺構や土坑出土例が若干あるのみである。

このように資料が乏しく、富山県の土器製塩の実態は、まだまだ不明な点が多いが、製塩土器の様相からすれば、各時期を通して能登の影響下にあったといえよう。

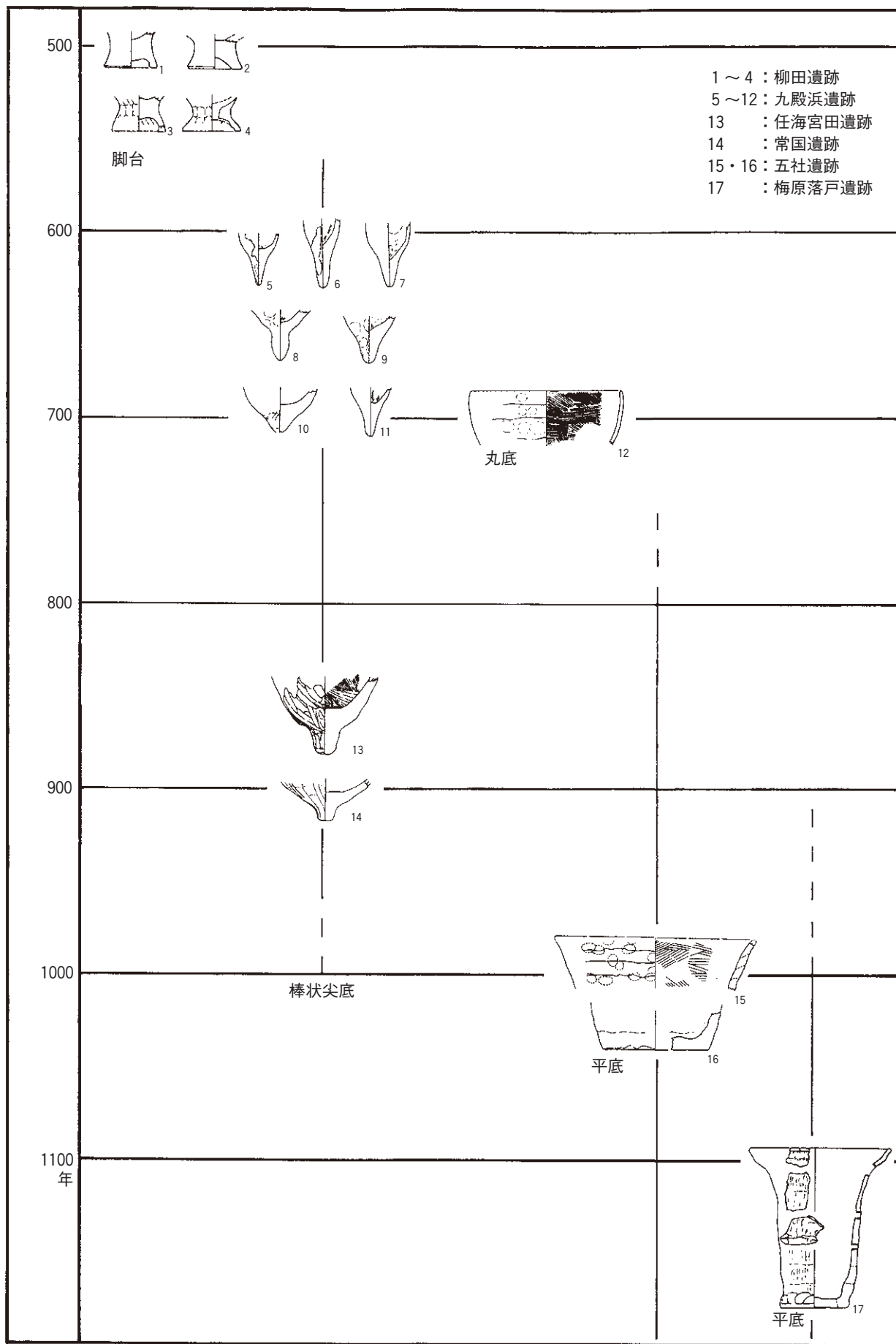
10世紀以降、生産地は朝日町周辺の海岸部に移っていたと考えられるが、8・9世紀の生産地は不明である。特に8世紀は製塩土器そのものの出土例が少なく、北陸の周辺地域に存在するような大型の製塩土器についても確実な例を確認できない。この点の評価が、今後の課題となるであろう。

富山県の製塩土器出土遺跡

遺跡名	所在地	水系	河川	標高 (m)	海岸からの距離 (km)	時期	製塩土器分類	遺構その他
1 九殿浜遺跡	氷見市	臨海平野	—	4	0.1	6C末～7C、7C末～	棒状尖底/丸底	焼土遺構(炉?)
2 大境洞窟住居跡	氷見市	臨海平野	—	5	0.0	8C初C、(9～10C)	棒状尖底/平底	
3 宇波西遺跡	氷見市	宇波川	宇波川	16	1.5	7C後半～8C前半	棒状尖底	
4 小杉谷内遺跡	氷見市	臨海平野	—	3	0.1	6C前半	脚台	
5 藪田遺跡	氷見市	臨海平野	—	6	0.4	6C前半/6C末～7C	脚台/棒状尖底	
6 阿尾島尾A遺跡	氷見市	臨海平野	—	5	0.3	7C後半	棒状尖底	
7 阿尾島田A遺跡	氷見市	臨海平野	—	4	0.5	7C後半	棒状尖底	
8 稲積天坂遺跡	氷見市	余川川	余川川	7	1.5	7C	棒状尖底	
9 朝日貝塚	氷見市	臨海平野	—	5	0.5	6C前半	脚台	
10 上久津呂中屋遺跡	氷見市	布勢水海	—	5	5.5	古代		
11 栗原A遺跡	氷見市	布勢水海	—	10	5.5	8C後半～9C前半	棒状尖底	
12 惣領浦之前遺跡	氷見市	布勢水海	—	10	7.0	古代		
13 柳田遺跡	氷見市	臨海平野	—	5	1.0	5C末～6C前半	脚台	
14 山岸遺跡	高岡市	臨海平野	—	10	0.6	7C初	棒状尖底	
15 越中国府関連遺跡	高岡市	臨海台地	—	15	1.0	8C末～	平底	
16 若坪岡田島遺跡	高岡市	小矢部川	小矢部川	10	9.0	7C/9～10C	棒状尖底/平底	
17 石名木舟遺跡	高岡市	小矢部川	岸渡川	22	18.0	7C第3四半期	棒状尖底	
18 五社遺跡	小矢部市	小矢部川	岸渡川	23	19.5	10C後半～11C	平底	
19 桜町遺跡	小矢部市	小矢部川	子撫川	25	21.0	7C/平安	棒状尖底/平底	
20 小白山山麓遺跡	小矢部市	小矢部川	洪江川	70	29.0	8C後半	平底	
21 院林遺跡	南砺市	小矢部川	旅川	57	25.0	7C前～中	棒状尖底	
22 在房遺跡	南砺市	小矢部川	山田川	67	27.0	7C前半	棒状尖底	
23 梅原落戸遺跡	南砺市	小矢部川	権現堂川	70	34.0	9C前半/12C後半	棒状尖底(短脚大型)/平底	集石遺構(焼土)
24 蛇喰正覚寺遺跡	南砺市	小矢部川	赤祖父川	128	21.0		棒状尖底	
25 下佐野遺跡	高岡市	小矢部川	千保川	11	10.0	平安	平底か	
26 八塚C遺跡	射水市	庄川	和田川	7	7.0		平底か	
27 常国遺跡	高岡市	庄川	和田川	20	12.0	9C～10C初	棒状尖底(短脚大型)	土坑出土
28 北高木遺跡	射水市	庄川	神楽川	3	5.0	8C後半～9C前半	棒状尖底(短脚大型)・平底	
29 中曾根遺跡	高岡市	放生津湯	—	2	2.0		棒状尖底	
30 小杉流通業務団地No.6遺跡	射水市	放生津湯	下条川	20	9.5	6C末～7C初	棒状尖底	
31 小杉流通業務団地No.7遺跡	射水市	放生津湯	下条川	22	9.5	6C末～7C初	棒状尖底	
32 小杉丸山遺跡	射水市	放生津湯	下条川	25	10.5	7C中	棒状尖底	
33 南太閤山I遺跡	射水市	放生津湯	下条川	30	10.0	6C後半～7C前半	棒状尖底	
34 上野南I遺跡	射水市	放生津湯	下条川	25	10.5	7C第1四半期	棒状尖底	
35 米田大覚遺跡	富山市	神通川	神通川	7.5	3.0	9C	棒状尖底(短脚大型)	
36 金屋南遺跡	富山市	神通川	井田川	11	8.0	9C後半～10C前半	平底	
37 砂子田I遺跡	富山市	神通川	坪野川	15	11.5	7C末	棒状尖底	
38 中名I・V遺跡	富山市	神通川	坪野川	21	13.0	7C	棒状尖底	
39 中名II遺跡	富山市	神通川	坪野川	23.5	13.0	平安	平底	
40 轟坂I遺跡	富山市	神通川	神通川	10	9.5	9C第4四半期	平底	生産土坑
41 友杉遺跡	富山市	神通川	荒川	26	13.0	9C後半～10C初め	棒状尖底(短脚大型)	
42 任海宮田遺跡	富山市	神通川	荒川	30	13.5	9C～10C前半	棒状尖底(短脚大型)/平底	
43 吉倉B遺跡	富山市	神通川	荒川	35	14.5	平安	棒状尖底(短脚大型)	
44 栗山楮原遺跡	富山市	神通川	荒川	36	14.5	10C前半	棒状尖底(短脚大型)	
45 上新保遺跡	富山市	神通川	いたち川	36	12.0	平安		
46 利田横枕遺跡	立山町	白岩川	八幡川	25	8.0	6C後半～7C前半	棒状尖底	
47 古海老江遺跡	舟橋村	白岩川	細川	18	7.5	古墳末?		
48 辻坂の上遺跡	立山町	白岩川	板津川	31	8.5	7C	棒状尖底	
49 東江上遺跡	上市町	上市川	上市川	16	5.0	7C末	棒状尖底	竪穴住居内と周辺
50 仏田遺跡	魚津市	臨海平野	—	17	1.0	平安		
51 じょうべのま遺跡	入善町	臨海平野	—	1	0.0	7C/平安前期	棒状尖底/平底	川跡出土
52 道下遺跡	朝日町	木流川	木流川	24	1.5	10C後半	平底	
53 宮崎塚田遺跡	朝日町	臨海平野	—	6	0.5	中世		
54 宮崎・境遺跡	朝日町	臨海平野	—	6	0.2	中世?	脚	
55 境堂田遺跡	朝日町	臨海平野	—	6	0.2	12C	平底	
56 境間跡遺跡	朝日町	臨海平野	—	6.5	0.2	中世	平底・支脚	製塩炉
57 馬場山D遺跡	朝日町	臨海台地	—	20	0.5	10C	平底・円筒型土製品	石組(焼土)
58 境A遺跡	朝日町	臨海台地	—	10	0.5	平安	平底	焼土
59 境金剛遺跡	朝日町	臨海台地	—	30	0.3	平安?	平底	

遺跡分布図





富山県の製塩土器編年案 (1 / 6)

新潟県における製塩関連遺跡

尾崎 高宏（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）

新潟県は、越後地域と離島である佐渡島および粟島を合わせると約630kmにわたる非常に長い海岸線を有する。県内ではこれまで112か所の製塩関連遺跡が知られており、うち71か所は佐渡島の海岸部もしくは海岸段丘周辺に集中的に分布し、一大生産地の様相を呈する。しかし、佐渡の製塩関連遺跡については、発掘調査事例が少なく、現状では実態が明らかとなっていない。一方、越後地域については、海岸砂丘及び内陸砂丘の周辺のほか、海岸部からは遠く離れた内陸部の河川に面した微高地等でも製塩関連遺物が出土する遺跡が分布することが近年明らかとなり、内水面交通による物資の流通や水産加工等への塩の使用に関する新たな知見が得られた。

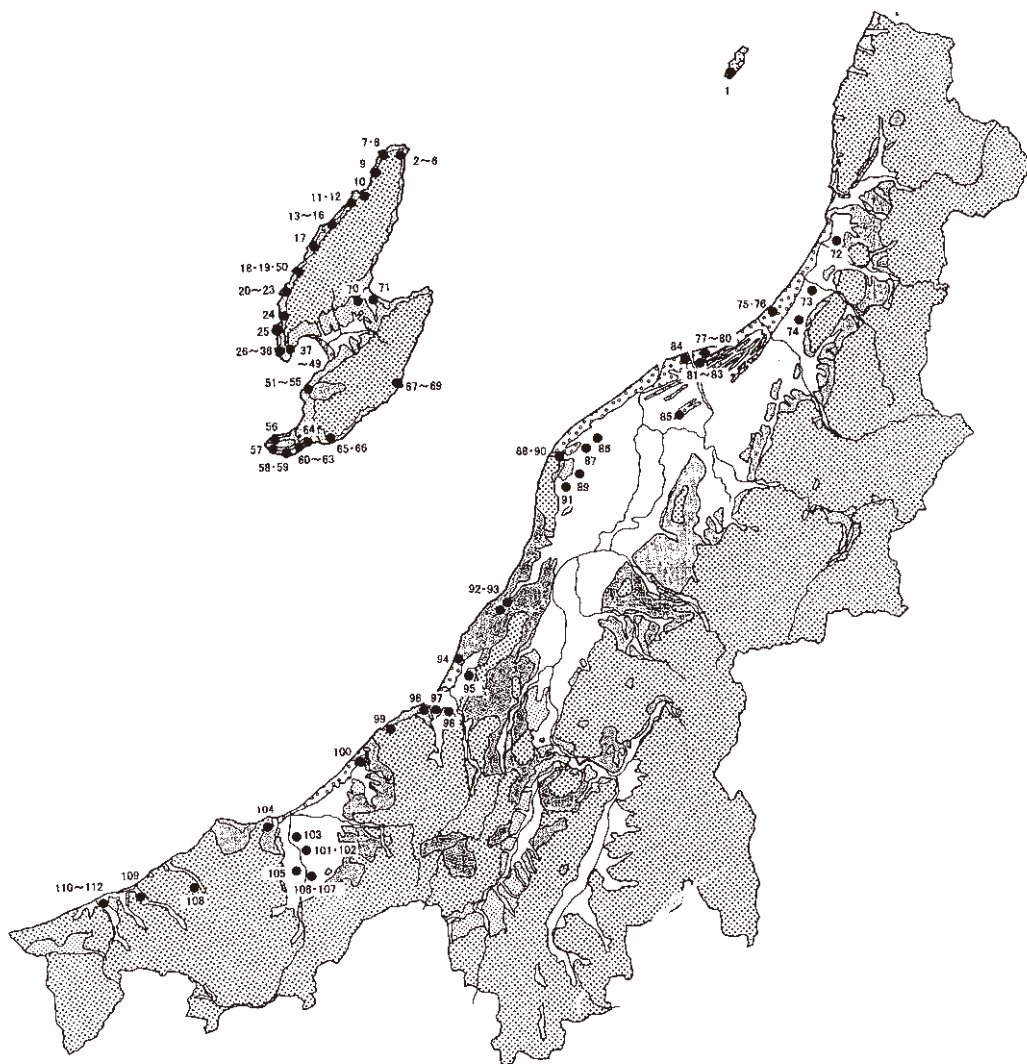
時期については、古代（8世紀～10世紀）が主体となる。以下、時期ごとの変遷について概観する。

製塩土器の変遷と時期ごとの特色

- ①古代以前：古代以前の製塩関連資料は近年まで確認されていなかったが、胎内市天野遺跡（古墳前期と中期の集落遺跡）で県内初となる古墳時代中期の製塩土器が出土した。報告書によれば胎土分析の結果から、能登・七尾市周辺遺跡（三室オオタン遺跡）との類似性が指摘されている。
- ②古代 i 期（8C 前半）：柏崎市刈羽大平遺跡など越後地域の海岸部において製塩が開始される。ii 期も含め、土器製塩の初期段階においては能登地域の製塩土器との器形の類似性が認められる。
- ③古代 ii 期（8 世紀後半～9 世紀初）：大型平底・丸底のほか、口縁部屈曲のものなど、器形が多様化、混在する。なお、E 類とした小型で口縁屈曲の「出山遺跡タイプ」については、共伴する土器から当該期に位置づけているが、富山県梅原落戸遺跡（12世紀）との器形の類似性から年代が大幅に下がるという見解もあり、煎熬具か焼塩具かの機能的側面も含め、類例の増加を待って検討の必要がある。
- ④古代 iii 期（9 世紀前半）：大型平底（A 類）・中型（C 類）・器台（円筒器台）のセットが確立し、これ以降、このセットについては土器製塩の終焉まで継続する。
- ⑤古代 iv 期（9 世紀後半）：A 類では器形・容量の大型化傾向が見られる。また、県西部の高田平野周辺（越後国府周辺）において、内陸部の官衙関連遺跡など有力遺跡（消費遺跡）で棒状尖底土器が出土する事例が見られるようになる。生産地域（糸魚川地域）からの物資の流通・集積を示す。
- ⑥古代 v 期（10世紀）：A 類は器形の外反傾向が強まり、大型化するとともに、底部の接合方法が変化（円板外周に粘土紐巻き上げ→円板上部に巻き上げ）する。村上市沢田遺跡では内水面に面する微高地で製塩炉が検出され、製塩土器とともに魚骨が出土し、水産加工場的な性格が推定されている。同市西部遺跡は、鍛冶・漆・製塩などの手工業生産が大型の掘立柱建物内に集約して確認された。
- ⑦iv 期以降（11世紀以降）：土器煮炊具の終焉とともに製塩土器も確認できなくなり、鉄釜へ移行したものと考えられる。

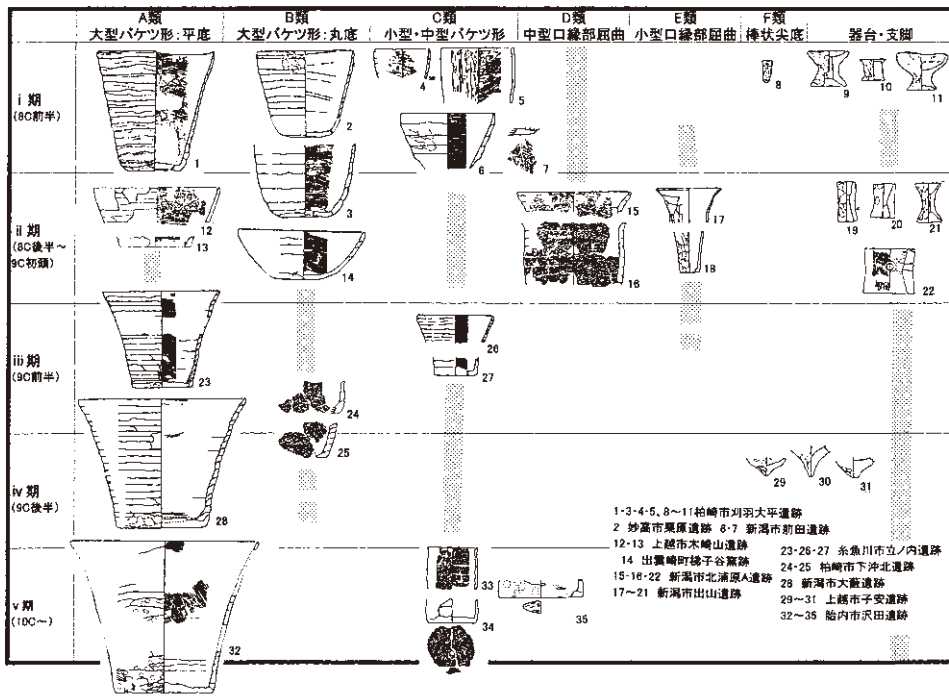
討議・資料見学会から

天野遺跡出土土器について：器形のみで比較した場合、「大阪湾 I 式（庄内併行）」との類似性も否定できないのではないかとのご指摘をいただいた。能登地域の当該期資料（祖浜遺跡出土土器）との比較では、脚台部のつくりが明らかに祖浜例とは大きく異なっており、後出する国分高井遺跡出土例に近い印象がある。今後、出土事例の増加を待って比較検討したいと考えている。

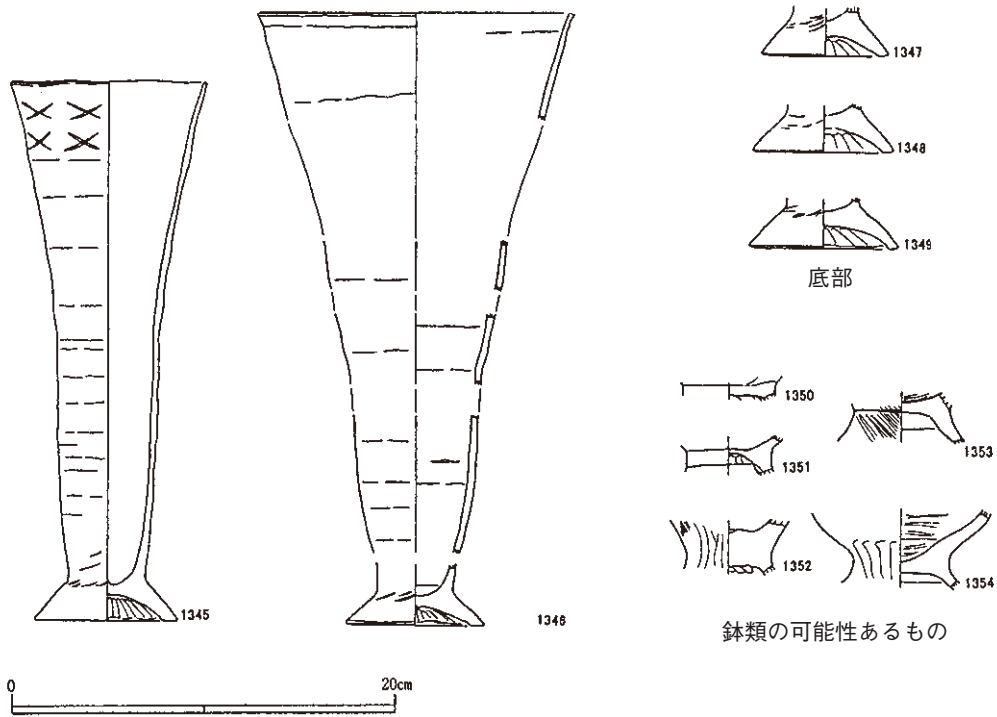


1 茂崎島遺跡	粟島浦村	29 塩ヶ崎遺跡	佐渡市	57 深浦遺跡	佐渡市	85 小丸山遺跡	新潟市
2 大津浜遺跡	佐渡市	30 鬼が岩遺跡	佐渡市	58 萩ノ浦遺跡	佐渡市	86 的場遺跡	新潟市
3 弾崎製塩遺跡	佐渡市	31 目観音堂遺跡	佐渡市	59 への割遺跡	佐渡市	87 六地山遺跡	新潟市
4 二ツ亀遺跡	佐渡市	32 浜戸遺跡	佐渡市	60 新谷竹ノ腰遺跡	佐渡市	88 北浦原 A 遺跡	新潟市
5 藻浦製塩遺跡	佐渡市	33 杉島岩陰遺跡	佐渡市	61 カコイ場遺跡	佐渡市	89 大敷遺跡	新潟市
6 菖蒲平浜遺跡	佐渡市	34 紋兵衛遺跡	佐渡市	62 小谷洞穴遺跡	佐渡市	90 前田遺跡	新潟市
7 大野製塩遺跡	佐渡市	35 差輪遺跡	佐渡市	63 かがが井戸遺跡	佐渡市	91 下稲場遺跡	新潟市
8 願製塩遺跡	佐渡市	36 石ヶ原洞穴	佐渡市	64 西平遺跡	佐渡市	92 梯子谷窯跡	出雲崎町
9 北鶴島製塩遺跡	佐渡市	37 砂原 A 遺跡	佐渡市	65 柳沢遺跡	佐渡市	93 寺前遺跡	出雲崎町
10 岩屋山第 2 洞穴	佐渡市	38 新田 A 遺跡	佐渡市	66 瀧屋遺跡	佐渡市	94 刈羽大平遺跡	柏崎市
11 関公民館前遺跡	佐渡市	39 砂原神社遺跡	佐渡市	67 青木遺跡	佐渡市	95 戸口遺跡	柏崎市
12 釜の元遺跡	佐渡市	40 宮の川遺跡	佐渡市	68 出口遺跡	佐渡市	96 京田遺跡	柏崎市
13 小田浜田遺跡	佐渡市	41 二見元村遺跡	佐渡市	69 水ナシ遺跡	佐渡市	97 下沖北遺跡	柏崎市
14 小田南遺跡	佐渡市	42 月見不池遺跡	佐渡市	70 和木遺跡	佐渡市	98 ダルマ岩遺跡	柏崎市
15 小僧の川遺跡	佐渡市	43 送り坂遺跡	佐渡市	71 春日町遺跡	佐渡市	99 五反田遺跡	柏崎市
16 アンジャの浜遺跡	佐渡市	44 送り崎遺跡	佐渡市	72 西部遺跡	村上市	100 木崎山遺跡	上越市
17 北河内熊野神社遺跡	佐渡市	45 台ヶ鼻東遺跡	佐渡市	73 沢田遺跡	胎内市	101 今池遺跡	上越市
18 藻浦岬遺跡	佐渡市	46 台ヶ鼻遺跡	佐渡市	74 天野遺跡	胎内市	102 子安遺跡	上越市
19 南片中ノ川遺跡	佐渡市	47 塩ッ田遺跡	佐渡市	75 下原遺跡	胎内市	103 一之口遺跡(西地区)	上越市
20 井戸島の根遺跡	佐渡市	48 城ヶ鼻遺跡	佐渡市	76 村松浜遺跡	胎内市	104 東カナクソ谷遺跡	上越市
21 達者向遺跡	佐渡市	49 弁天岩遺跡	佐渡市	77 出山遺跡	新潟市	105 龍峰遺跡	上越市
22 達者中村遺跡	佐渡市	50 番場遺跡	佐渡市	78 東港太郎代遺跡	新潟市	106 栗原遺跡	妙高市
23 釜屋遺跡	佐渡市	51 滝脇遺跡	佐渡市	79 サン化学前遺跡	新潟市	107 宮ノ本遺跡	妙高市
24 下相川吹上遺跡	佐渡市	52 背ノ沢古墳	佐渡市	80 東港亀塚遺跡	新潟市	108 角地田遺跡	糸魚川市
25 どのの潤遺跡	佐渡市	53 背ノ沢遺跡	佐渡市	81 神谷内遺跡	新潟市	109 立ノ内遺跡	糸魚川市
26 かまんど遺跡	佐渡市	54 大立遺跡	佐渡市	82 向山遺跡	新潟市	110 道者ハバ遺跡	糸魚川市
27 大漁遺跡	佐渡市	55 亀脇遺跡	佐渡市	83 横山遺跡	新潟市	111 山岸遺跡	糸魚川市
28 助岩岩陰遺跡	佐渡市	56 大鼻崎遺跡	佐渡市	84 阿賀野川河口遺跡	新潟市	112 田伏山崎遺跡	糸魚川市

第 1 図 新潟県内の製塩関連遺跡



第2図 古代製塩土器の変遷



第3図 胎内市天野遺跡出土製塩土器

東北地方の土器製塩

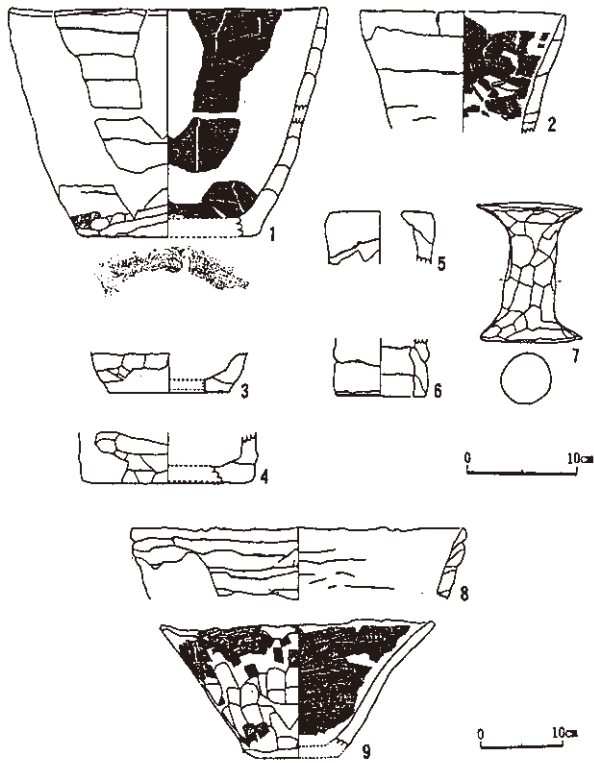
柴田陽一郎（秋田県埋蔵文化財センター）

東北地方の土器製塩は縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代に行われていたことが判明している。遺跡は縄文時代では太平洋沿岸域を中心とした福島県、宮城県、岩手県と青森県の日本海・陸奥湾沿岸域に分布し、確実な年代は晩期前半の大洞 B-C 式～後半の大洞 A 式までである。弥生時代では数が極めて少なく、判然としているのは太平洋沿岸域の宮城県で 7 箇所である。奈良時代でも同様で日秋田県と宮城県で 2 箇所のみである。平安時代では東北各県で確認されている。本稿では紙幅の関係で、奈良・平安時代についてのみ概観する。

東北地方の奈良・平安時代の製塩土器は平底で、石川県能登地方、新潟県と同県の佐渡地方や山形県の日本海側や青森県の日本海側～陸奥湾沿岸、太平洋沿岸、それに太平洋沿岸側の岩手県、松島湾沿岸や福島県の沿岸部や内陸部でも出土し、東北に広く分布している事が判明している。製塩土器に伴い土製支脚が出土する遺跡もある。これら遺跡の年代は 8 世紀後半～10 世紀で考えられている。その系譜は若狭湾沿岸で 7 世紀に作られるようになった船岡式製塩土器にあると考えられている。

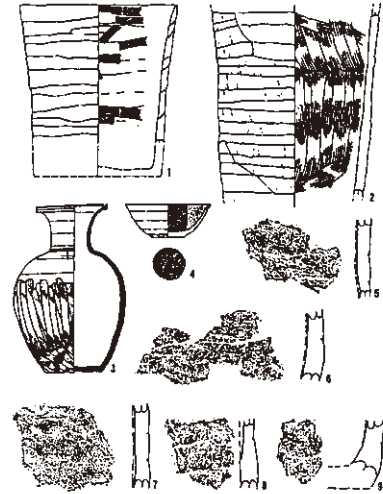
奈良時代の遺跡は秋田県のカウヤ（「コウヤ」と発音する）遺跡と宮城県の新浜 B 遺跡である。カウヤ遺跡では竪穴住居跡、焼土遺構などが検出され、竪穴住居跡から須恵器杯、北陸型の長胴甕と共に厚手の平底製塩土器、円筒形土製支脚が出土している。新浜 B 遺跡では 2 基の炉跡から薄手の平底製塩土器が出土している。器形は盥（タライ）のように浅く、やや厚い底部から胴部がやや外反し、薄い胴部から口縁部がほぼ直立気味に立ち上がる特徴のある土器（図 7 - 1～10）である。

平安時代では律令制の浸透と共に製塩遺跡数が飛躍的に増加する。先述のカウヤ遺跡で焼土遺構（SN06）から口径 40cm のバケツ形の平底製塩土器や播鉢形の土器が出土している（図 1 - 8・9）。さらに作業場と考えられる遺構（SX11）からは須恵器杯、土師器杯、北陸型の長胴甕と共に、底部外面に木目状の圧痕が残る平底製塩土器や棒状土製支脚、円筒形土製支脚が出土している（図 1 - 2～7）。ここでは形態の異なる支脚の共伴が特筆される。遺構は他に「コ」の字状の石組炉があり、焚口部に円筒形土製支脚が埋設される（図 3 - 3、図 4）。埋土から平底製塩土器等が出土している（図 3 - 1・2）。秋田県の立沢遺跡では焼土遺構や土坑から平底製塩土器や円筒形土製支脚が出土している（図 5）。円筒形土製支脚には胴部中央に円孔が穿たれており、新潟県の下沖北遺跡、宮城県の江ノ浜貝塚（図 7 - 35・36）で類例のある稀な例である。秋田県の頭名地遺跡では土製支脚下端部に「U」字状の切り込みが入る例もある。青森県では 42 箇所の遺跡が確認されており、製塩遺跡（図 6）と消費地である集落遺跡（図 2）から、白砂式と呼ばれるバケツ型の製塩土器が出土している。製塩遺跡では製塩土器と土製支脚との共伴例が多く、支脚の形態は棒状や土管状で地域的なバラエティがあるようである。製塩土器の底部には、秋田県でもあるが、板目状圧痕が見られる例もある。青森県は律令制の及ばない地域であったが、この時期には擦文文化が定着しており、遺跡の調査例から、陸奥湾沿岸の土器製塩集団と擦文文化を担った人達との交流のあったことが判明している。宮城県では松島湾沿岸で平安時代だけで 114 の製塩遺跡が確認されている。製塩土器は新浜 B 遺跡の 2 号住居跡や、江ノ浜貝塚、館ヶ崎など多くの遺跡の出土例がある。厚手・大形と薄手・小形の 2 種類が在り、いずれも平底で胴部から口縁部の立ち上がりはほぼ直角で、両者の使い分けが想定されている。土製支脚は先述の江ノ浜貝塚の円筒形土製支脚の他に棒状土製支脚も出土している（図 7 - 11～34）。近年、能登の真脇製塩遺跡では平底土器と支脚だけがセットで確認されていることもあり、今後は東北と北陸の遺跡の細かい比較・検討が必要である。（図の出典『日本土器製塩研究』青木書店）



1-焼土遺構(第1次調査) 2~7-その他の遺構(SX11)
8・9-焼土遺構(SN06)より出土

図1 秋田県カウヤ遺跡遺構内出土遺物



1-根城三丁目 2~4-表館(1)遺跡C住居跡煙出孔
・床面出土 5~9-90朝日山遺跡61号土坑出土

図2 青森県集落内出土製塩土器・伴出土器
[1~4=約1/12 5~9=約1/6]

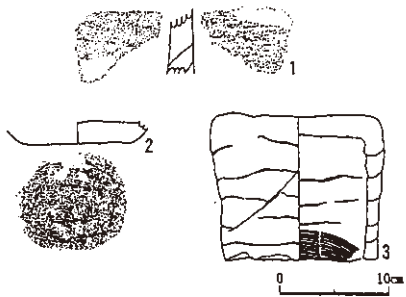


図3 秋田県カウヤ遺跡(SQ04)出土遺物

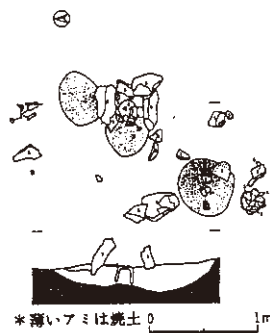
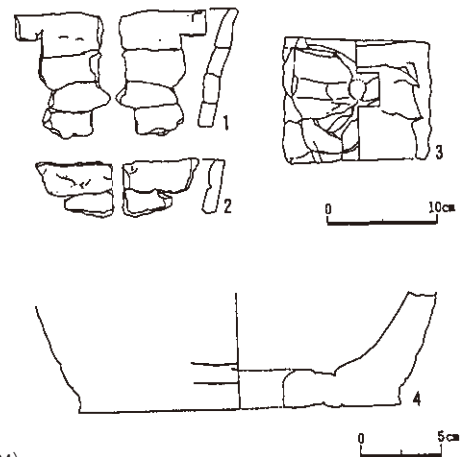
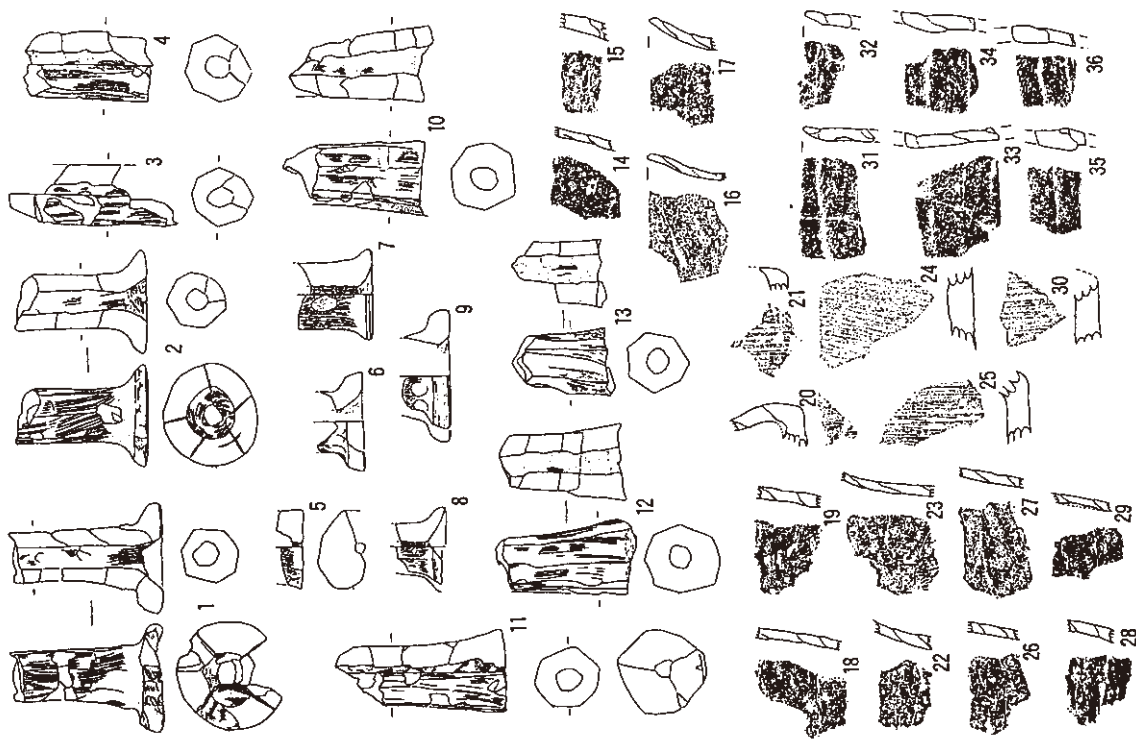


図4 秋田県カウヤ遺跡(SQ04)



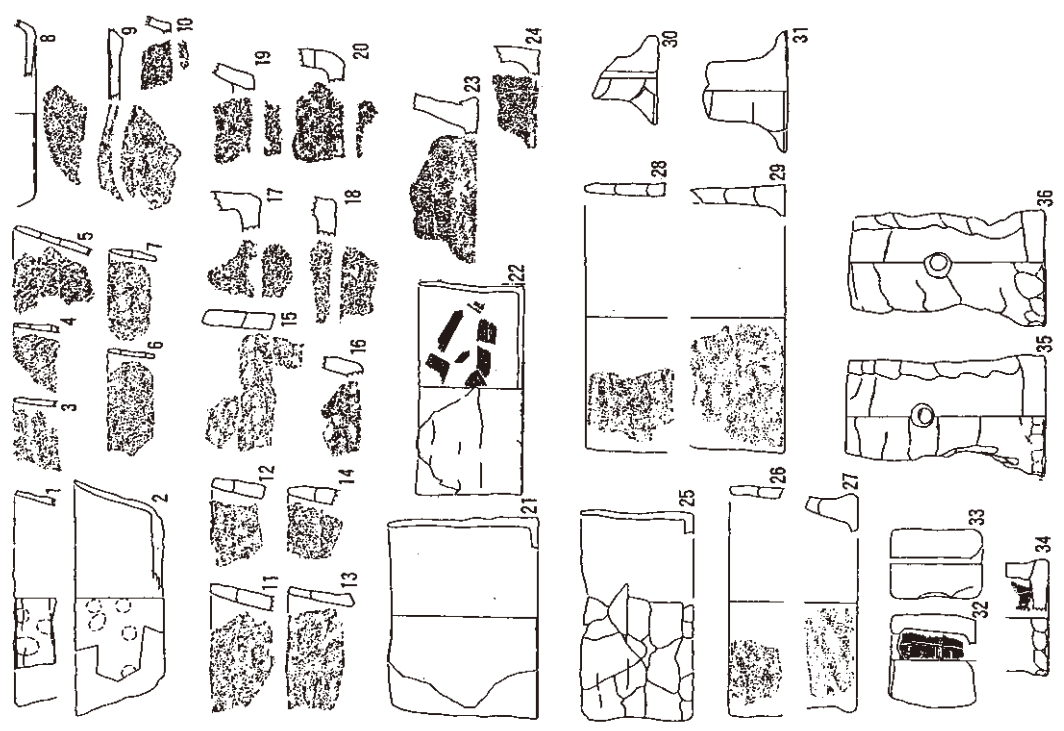
1・2・4-焼土遺構より出土
3-第5土壇底面より出土

図5 秋田県立沢遺跡出土遺物



1~13-土製支脚 14~36-白砂式土器 1~30-瓦高(5)遺跡出土
31~36-上尾飯(2)遺跡6H出土

図6 青森県内出土白砂式製塩土器・土製支脚〔約1/6〕



1~10(奈良時代)新浜B 11~20(平安時代)新浜B 21~24・35・36(平安)江ノ浜貝塚
25~31(平安)水浜 32~34(平安)鉾ヶ崎

図7 宮城県古代の製塩土器・支脚〔約1/6〕

討論と展望

荒木麻理子（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

地域別発表の後、討論を行った。討論にあたって、各地の事例報告の中で提示された、製塩土器の形態および機能と製塩炉の構造の関係性、製塩技術の系譜や形態変化の要因、あるいは地域間での比較など、いくつかの疑問点が整理され、討論のテーマとされた。

製塩土器の形態については、製塩実験により弱火あるいは炭火による長時間煎熬で作られた塩が煤や灰や不純物の入らない状態が良いものになること、加熱時に沸騰させず弱火を保てば煎熬中に土器が割れにくいということが知られており、より火の制御のしやすい自立可能な形態の脚台付製塩土器や棒状尖底製塩土器が発展したのではないかとの見解が示された。しかしながら、製塩土器の一律な形態変化は一律なものではなく、5世紀後半以降能登や九州、知多半島などで見られる脚台の長脚化や棒状脚の登場、備前瀬戸や大阪湾岸で見られる丸底化、8世紀より各地で見られる製塩土器の大型化や煎熬用と焼塩用への機能分化の動きなど、各地域ごとの独自性が見られ、単純な機能論だけでそれらの動きを捉えることはできない。また、7世紀末から8世紀にかけて若狭において成立した大型平底製塩土器と大型石敷炉を使用する新たな土器製塩は、日本海伝いに東方へ伝播するが、大型石敷炉は伝わらず、土器のみが伝わるということが知られており、炉をはじめとする製塩遺構の構造の選択にあたってその要因となるものには土器の機能・形態以外に何があるのか、製塩遺構が構築される地面の状態も関係するのかなどの検討課題も提示された。討論の最後には、各地の塩生産の背景にある政治および流通・取引の状況や製塩土器や製塩遺構などの分析を通じて製塩技術の伝播や系譜、生産体制について検討を進めていく方向が示され、展望とされた。

翌24日には、当センター研修室で資料検討会を行った。珠洲市真脇製塩遺跡、珠洲市鶴島遺跡、珠洲市大谷中学校東遺跡、七尾市庵遺跡、七尾市三引遺跡、七尾市小島西遺跡、志賀町米浜遺跡などの製塩土器、土製支脚などを見学した。製塩土器では、脚台付製塩土器や棒状脚製塩土器について成形や調整について時代や地域を追って観察した。また、平底製塩土器については底部の成形技法および内外面の輪積み痕や底部の板目圧痕などの調整に注意して他地域との比較検討を行うなどした。支脚では特に富山県や東北地方にも見られる円孔あるいはV字状の切込みをもつ円筒形の支脚に注目して、円孔や切込の入れ方や成形・調整法などについて、それぞれ比較検討を行った。



討論の様子



資料見学会の様子

天平宝字七年二月廿九日飯高息足

謹上 佐官尊左右邊

この文書によれば、造東大寺司の綿交易使だった飯高息足が、外国に人を遣わして綿の交易を行わせている。しかし、屯別六十五文で売るところを六十文でしか売却できなかったため、壘田直銭が到来した後にこれを補填することの了解を求めている。本文書にある壘田はおそらく飯高息足の経営していた壘田と考えられるが、その壘田直銭が、交易の不足分を補うものとされていることが注目される。

飯高息足状にみられる状況を参照すれば、上記のような性格を持つ本遺跡の周辺で、同様の賃租経営が行われており、本木簡にみられるような津周辺での田直の収取が、そこで展開される交易に結びついていた可能性も指摘できよう。

(平川 南、武井紀子)

- (1) 平川南 一九九七年 「考察 金沢市金石本町遺跡木簡」『金石本町遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- (2) 平川南 一九九九年 「金沢市金石本町遺跡」『金沢市教育委員会調査』出土木簡Ⅰ『扇台遺跡・金石本町遺跡・矢木ジワリ遺跡・夕日寺遺跡』金沢市教育委員会
- (3) 安英樹・大西顕ほか 二〇〇九年 「金石本町遺跡」石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
- (4) 小西昌志 一九九六年 『金石本町遺跡Ⅱ』金沢市教育委員会
- (5) 平川南 一九九二年 「第五四次調査出土漆紙文書」『秋田城出土文字資料集Ⅱ』秋田城跡調査事務所研究紀要Ⅱ『秋田城跡調査事務所』
- (6) 田中一穂 二〇〇八年 「木簡について」『延命寺遺跡』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- (7) 平川南 二〇〇六年 「畝田西遺跡群出土文字資料と古代港湾都市」『畝田西遺跡群Ⅵ』石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター

束。地子各依田品^三令^レ輸五分之一^一。若惣計国内^二。所^レ輸不滿十分之九^一者、勘出令^レ填。但不堪佃田、聽^レ除十分之二^一。其租一段穀一斗五升、町別一石五斗。皆令^レ營人輸之。

二点目は、穎稻と稲穀が通計されていることである。通常、穎稻は「束一把」、脱穀後の粉（穀）の状態は「石（斛）一斗一升」と数量単位を表記する。

○兵庫朝来市 柴遺跡出土木簡

「驛子委文マ^{（豊方置カ）}足十束代稲粉一尺」 三二六×三二×五・五 ○三三

※「一尺」^{（せき）}＝「一石」

○三重県桑名市 柚井遺跡出土一石木簡および二石木簡

・「<櫻樹郷守部春□穎代粉一斛<」 一九八×二四×四 ○三二

・「<櫻樹郷□頭守部穎代粉一石 □五百□<」

一八八×二二×九・五 ○三一

これらの木簡は、いずれも穎稻（束）で収めるべきところを、「代」として粉（穀）の状態に進上していることを示す事例である。古代における稲の収取形態については、穎稻のまま収納し、必要に応じて出倉して脱穀・舂米させる場合と、徴収の段階で脱穀もしくは舂米作業までを含めて課し、穀（もしくは黒・白米）の状態で納めさせる場合の二通り確認できる。おそらく使用する側（徴収する側）の必要に応じて、「代」納収取したのであろう。本木簡において穎稻と稲穀が混在して計上されているのも上記のような事由によるのであろう。

さらに、本遺跡の立地との関係についてみれば、交通の要衝地における田直の収取、すなわち賃租経営が行われていることが指摘できる。

本遺跡は犀川河口に位置し、小型倉庫群が検出されている。近隣の畝田・寺中遺跡では、郡符木簡や「津」「津司」と記された墨書土器が出土しており、八世紀前半から郡津として機能していたことがうかがわれる。さらに、戸水C遺跡では九世紀代の「津」と記された墨書土器が出土しており、この一帯が古代における大規模な港湾都市を形成していたと考えられる⁽⁷⁾。

犀川の流域には東大寺領の横江庄遺跡が存在し、また、畝田・寺中遺跡出土第八号木簡には、「右大辨史田家牛加比マ宮万呂」と書かれており、付近に「右大弁史田家」が存在していたことをうかがわせる。これらのことから、この一帯には中央の貴族や寺社の荘園やその経営拠点が集中しており、交易や物資運搬の場となる津には現地管理者が住宅と共に物資収納の倉庫を設置していたと想定されるのである。本木簡にみえる「倉部」「贄人」の存在も、物資の集積地における倉庫業務、あるいは都との強い関連をもつ同地の性格を表すものとしてとらえられる。

○天平宝字七年二月廿九日飯高息足状

（続々修四十四帙十、『大日本古文書』十六―340―341）

謹恐惶請処分

所賜綿卅連

先日仰給直屯別六十五文者
今所請屯別充六十文可申状

且進納錢拾肆貫

右、縁先日宣、如数將進思食、遣外国交易、附不能人、每物完減、不堪望心、仍望請垂鴻恩寵、依所請状領納幸甚、今所遺錢、依^{（墾）}田來、隨宣旨状、追可奉上、子細事趣、含使師口状、不勝至憑、伏乞処分。

〔オモテ面〕〈米一石〉 + 〈田直七束〓米三斗五升×2〓七斗〉〓一石七斗
 (ウラ面) 〈三十四束〓米一石七斗〉

となり、数値が一致する。すなわち本木簡は、オモテ面に米一石と穎稻十束の納入が記され、ウラ面に「并」としてその合計値が束単位で計上されたものと考えられる。

「并」が合計額として記されている例として、一例挙げておきたい。

○平城京左京二条二坊五坪 二条大路濠状遺構(北)

・讃岐国山田郡田井郷

凡直佐留三斗

并一俵

・神人八国三斗

一七二×三三×五〇三二

金石本町遺跡出土木簡の内容について、以下の二点の特徴として注目できらるであらう。

まず、一点目は田直が記載されているという点である。

○兵庫県豊岡市 宮内黒田遺跡出土木簡

・〓里〓鳥戸〓田部〓女〓可〓〓不〓〓

・冊代 午年分直稻八束度手賃得人

同里神マ廣嶋

「若田者衣女分進上人」

天平勝宝四年十月九日

「鳥取マ万呂」
 「知忍海マ馬男」
 「鳥取マ公手、直受鳥取マ衣女」

四七四×五〇×六〇一一

○島根県出雲市 青木遺跡出土78号木簡

・「売田券 船岡里戸吉備部忍手佐井宮税六束不堪進上」

・「仍〓船越田一段進上 天平八年十二月十日」

「長若倭マ臣麻〓」

三五二×四二×四〇一一

○新潟県上越市 延命寺遺跡出土木簡

・物部郷〓里戸主物マ多理丸 物マ鳥丸野田村奈良田三段又中家田六
人伊神郷人酒君大嶋田直米二石一斗

〔有九〕

・田沽人多理丸戸人 物マ比呂 天平七年三月廿一日相知田領神田君万

〔有九〕

四八六×四九×六〇一一

これらは、土地の賃租に関わる売田木簡である。売田木簡の特徴としては、

- ①郷名など本貫地の記載と、戸主・戸口の人名が記載されている
- ②土地の所在地と、その面積、価が記される
- ③年紀記載のあとに売人(所有者)・買人・証人・郡郷長などの関係者を記す

の三点が挙げられる⁶⁾。本木簡は、田直七束のみが記され、これらの記載を含まないので、「倉マ安倍弓田直七束」の部分は、売田行為そのものに
 関わるものではなく、単に賃租価値の収納についての記載であると判断でき
 きる。上部の「一石」「贄人〓〓〓」の稲がどのような性格か分
 からないが、おそらくは同様の賃租地子収納に関するものと推測されよう。
 また、田直七束という値から先に掲げた三例の木簡を参考にして、おおよ
 その田積を推定すれば、下田相当で約一段となる。三十四束すべてが田
 直であるとすれば、下田相当の田で約五・六段となる。

○延喜主税式

凡公田獲稲、上田五百束、中田四百束、下田三百束、下下田一百五十

二、釈文

○第四号木簡

倉マ安倍弓田直七束
贅人〔黒カ墨カ〕
□□□□□□□□
×

・×并 卅四束

(二三九) × 三〇 × 七 〇八一

○第五号木簡

・×□鳥大夫□
×□□□□□□
×

(二二四) × 三五 × 十二 〇八一
(平川 南、武井紀子)

三、内容

《第四号木簡》

オモテ面の双行の右側は人名(倉部安倍弓) + 田直七束、左行も下端が判読できないが、同様に人名 + 田直の束数が書かれていたと考えられる。「弓」の字形は、次のように「方」に似たかたちをとる。

【図】『草書大字典』「引」



「贅人」については、秋田城出土第九号漆紙文書オモテ面に、

課戸主贅

男贅人部大麻□^{〔卅二〕}
左□

とある。また、山形県熊野田遺跡出土木簡にも「贅人繩継」という人名が見られる。

○山形県酒田市 熊野田遺跡出土木簡

□依如件但〔御カ〕□^{〔道カ〕}首□^{〔以カ〕}宣□□□□□□

但田者在贅人繩継□

(三五三) × (二九) × 六 〇八一

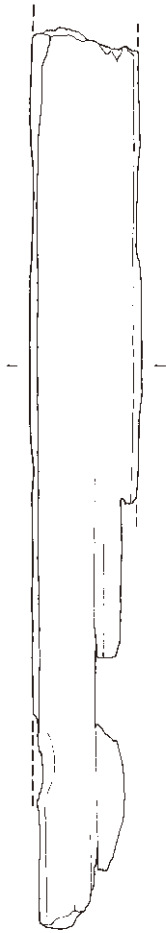
前掲の秋田城漆紙文書の継目裏書には「出羽國出羽郡井上□□□□天平六年七月廿八日」とあり、熊野田遺跡の地も天平期には出羽郡に属していたと考えられることから、「贅人」「贅人部」が出羽国に分布していたことが知られる⁽⁵⁾。「贅人」「贅人部」はこの他の資料にはみえないが、本木簡によつて、その分布が北陸地方にも確認できたことになる。

ウラ面の一文字目は、上半分が欠けているが「并」と判読できる。

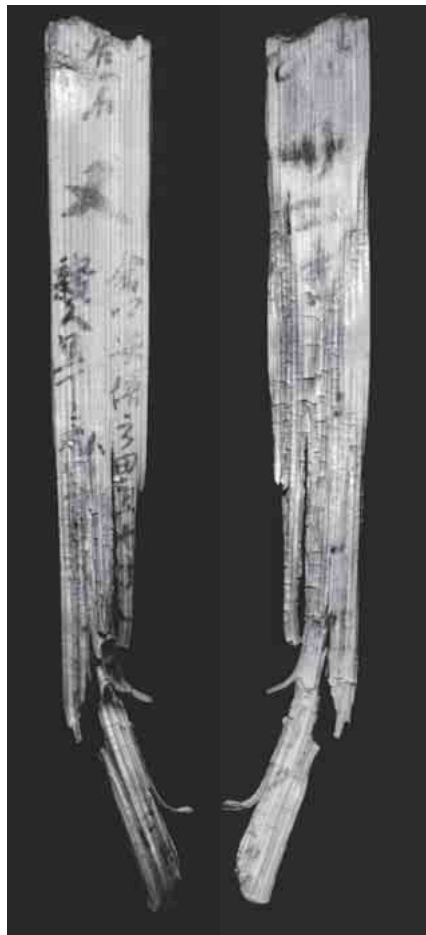
【図】『草書大字典』「并」



また、オモテ面とウラ面との関係については、次のように推測できるであろう。穎稻一束〓粳(穀)一斗〓米五升の換算にもとづいて、上段の一石を粳ではなく米と判断して、贅人□□□□□□部分の田直を左行と同様に七束とするならば、



第四号木簡(W62)実測図
(S=1/2)



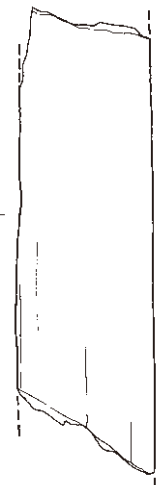
表面(合成) 裏面(合成)

第四号木簡赤外線写真

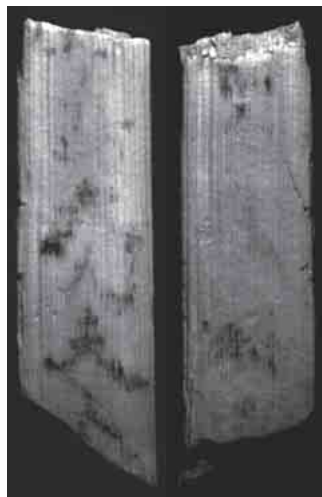


表面拡大

裏面拡大

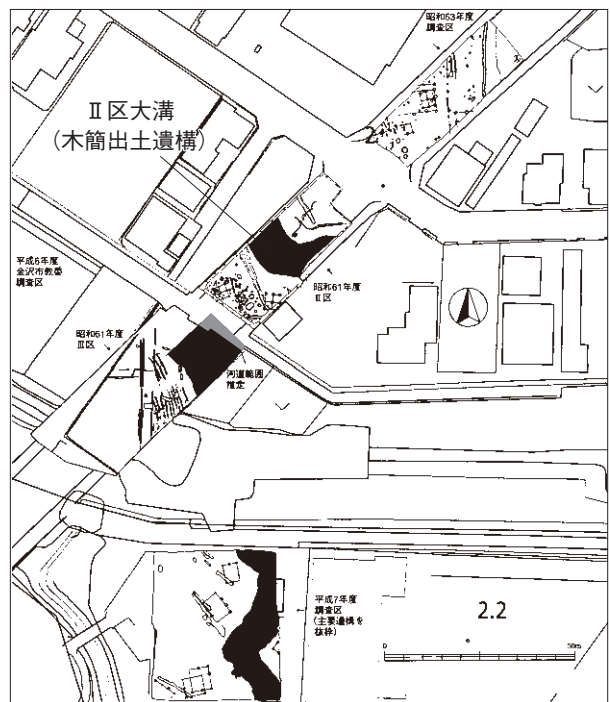


第五号木簡(W61)実測図
(S=1/2)



表面 裏面

第五号木簡赤外線写真



第2図 金石本町遺跡 南半部全体図 (S=1/2,000)

※報告書(3)より転載加筆

(注) この地図の作成にあたっては、金沢市長の承認を得て、同市発行の都市計画基本図を原図として使用している。(承認番号：平成21年2月10日 収都第695号)

石川県金沢市金石本町遺跡出土木簡について

平川 南(国立歴史民俗博物館)
武井 紀子(東京大学大学院)
大西 顕(特定事業調査グループ)

一、はじめに

金石本町遺跡は、石川県金沢市西北部の、犀川河口域の低地帯に位置する(第1図)。これまで九次にわたり発掘調査が行われており、平成七年(一九九五)の調査⁽¹⁾で三点の木簡が出土して、第一〜三号木簡と名付けられている他、平成八年(一九九六)の調査⁽²⁾でも木簡が一点出土している。

今回紹介する木簡二点は、昭和六十一年(一九八六)に調査が行われた第三次調査のⅡ区大溝より出土している。この木簡は、文字の存在は確認できていたが、全文の釈読ができなかったため、報告書⁽³⁾に釈文を収録できなかったものである。その後、国立歴史民俗博物館の平川南館長及び東京大学大学院生の武井紀子氏に釈読していただき、玉稿を得たので、その内容についてここで紹介するものである。なお、第四号木簡は報告書一三三頁のW62、第五号木簡は同頁のW61に該当する。

出土したのは、両木簡ともⅡ区大溝(河道跡・第2図)で、幅約十一・二m、深さは一・七m〜一・九mを測る。出土した古代の土器は、八世紀後半から九世紀後半代を中心とする時期のものである。

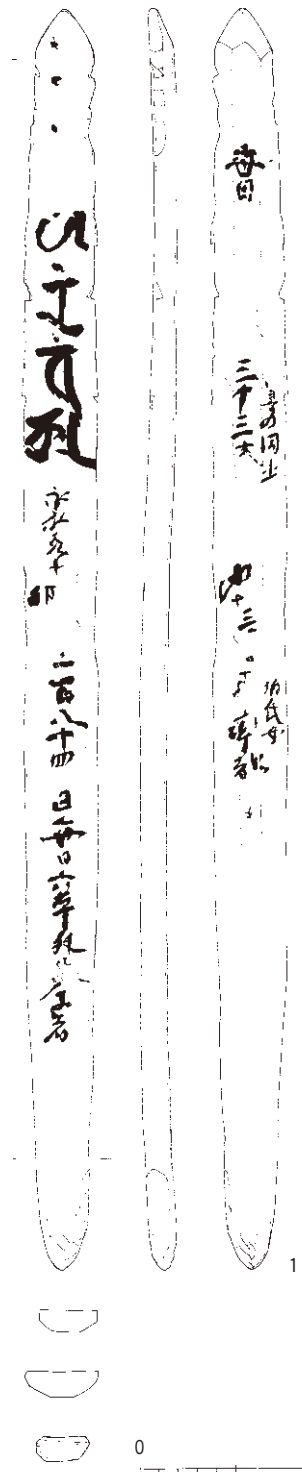
第四号木簡は柾目材で、上下端部は欠損している。両面に墨書が確認できる。第一〜三号木簡は、所属時期について七世紀後半代まで遡る可能性が指摘されているが⁽¹⁾、第四号木簡の「マ(部)」の字形については、七世紀後半にみられるカタカナの「ア」に近い、縦画を長く伸ばした「ア」の字形ではなく、「マ」という定型化した八〜九世紀代のものに近いことから、八〜九世紀代に属する木簡ではないかと、平川氏から教示を受けている。

第五号木簡は上下端部とも欠損で柾目材である。両面に墨書が確認できる。遺存状態の良好な面には、「大」などが続いており、習書であると判断される。裏面の墨書は薄く、解読できなかった。
本遺跡は、立地やこれまでの調査内容から、古代の湊(津)に関連する遺跡と考えられる。また、本木簡が出土したⅡ区大溝の南側に近接して、倉庫様の総柱建物⁽⁴⁾が確認されている他、平成六年の調査⁽⁴⁾でも倉庫群が検出されている。これらは物資の集積地としての本遺跡の性格を示すものである。
(大西 顕)

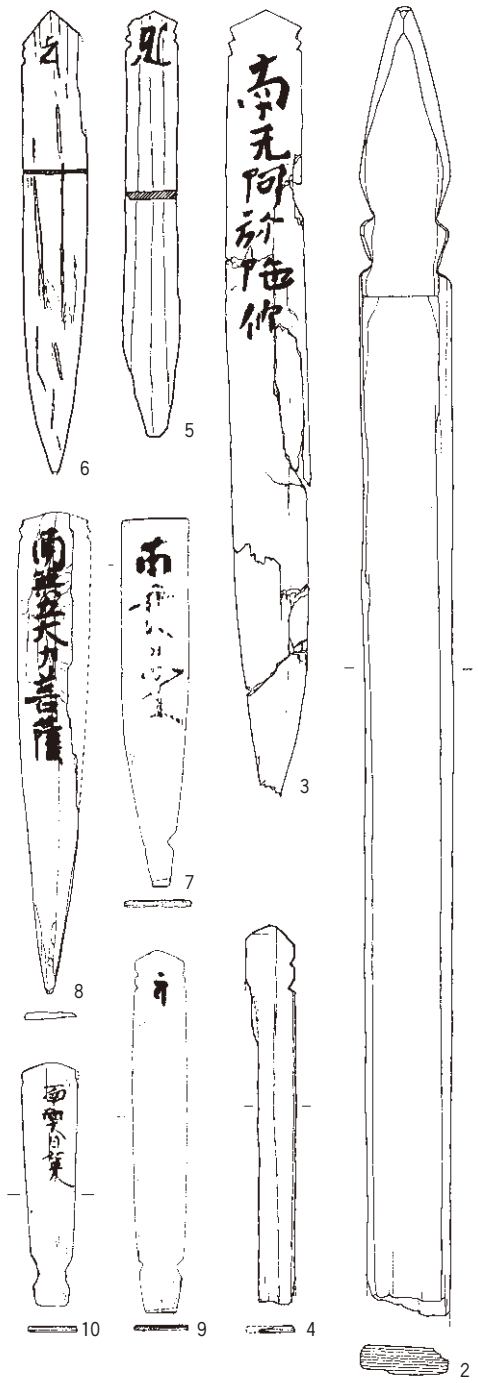


第1図 遺跡の位置 (S=1/50,000)
(石川県教育委員会 1992年発行『石川県遺跡地図』をもとに作成)

豊穂遺跡出土卒都婆



県内出土卒都婆



- 2 小島西遺跡
- 3 南吉田葛山遺跡
- 4 水白モンシヨ遺跡
- 5・6 三木だいもん遺跡
- 7～10 堅田B遺跡

第2図 卒都婆実測図 (S=1/4)

三、卒都婆の位置付け

中世の木製卒都婆の出土は本遺跡の他に県内六遺跡で確認されている。そのうち、珠洲市野々江本江寺遺跡出土の木製笠塔婆と木製板碑が一九〇七を越える大型の特殊品であるのを除くと、小島西遺跡出土品と南吉田葛山遺跡出土品が四〇七以上となる以外は三〇七以下の小型の笹塔婆である。頭部山形で左右に二段の切り込みを持ち、下端を尖らせるものが多い。墨書は六字名号、大日如来の種子、「南無大日如来」などがあり、紀年銘を記したものはない。堅田B遺跡出土品は二七点が報告されており、一部の笹塔婆は共伴する建長三年（一二五二）銘を持つ巻数板に「一、奉造立大日□□率都婆廿五本」との記載があることから、巻数板吊りの一連の行事に関連したものと推定され、時期と具体的な使用目的が知られる貴重な例となっている。これらは時代の特定できない南吉田葛山遺跡を除き、十一世紀末〜十四世紀前半代の資料である。

厚さ一ミリの前後の薄板状のこけら経は、県内では発掘調査で出土したものの二例、不時発見のもの三例、伝世品一例が知られる。そのうち、金沢市普正寺遺跡出土例は十五世紀中頃の所産、能美市湯屋出土経はその手法が十六世紀代の遺品に共通するとされ、十五世紀代の所産とみられる昨年発見の白山市宮保館跡出土例を合わせ、十五〜十六世紀代に片面書写のこけら経が確認される。一方、金沢市粟崎出土経は両面書写で、その法量や作工から十四世紀後半〜十五世紀前半の所産と推定されており、本卒都婆が造立された頃に県内で両面書写のこけら経による積善の行為が実際に行われていた証左と言える。

また、同じ永和年間の紀年銘資料として挙げられるのが七尾市中島町町屋に所在する石碑である。中央に「南無阿弥陀佛」、右に「永和三五月十五日佛心」、左に「日課六万遍念佛」と彫られたものであり、主尊や方法は違えども、毎日作善を積んで功德を得ることを目的とした点で共通する。材質は異なるが、短い永和年間の紀年銘資料が能登に続いて加賀でも

確認されたことは、当時様々な積善の営みが県内で盛んに行われていたことを裏付けるものでもある。

本遺跡出土の卒都婆は、他の出土事例に比べると年代がやや新しいが、頭部五輪塔形のものとしては県内初例であり、永和元年（一三七五）銘を記す点で貴重である。造立目的がこけら経写経供養に関連することが明らかにされた点においても稀少と言える。目的とした供養が、追善か逆修かは不明ながら、満願を祈念して、或いは満願の証として造立されたのである。何千枚ものこけら経の書写には、粟崎出土経に関して戸澗幹夫が指摘するように（戸澗一九九二）、相当の経済力が必要であったとみられること、供養或いは年中行事を執り行い、木製卒都婆を造立できたのは、県内の出土遺跡の様相から在地領主クラスであったことが想定されることから、本卒都婆についてもそうした有力者が関わっていると推定しておきたい。

本卒都婆は報告書刊行後、八年を経てようやく正しい評価がなされ、調査担当者として長年の胸のつかえがとれた想いである。末筆ではありますが、このたび釈読にあたり御尽力いただき、原稿執筆を御快諾下さった藤澤典彦氏、諸々の御協力・御指導をいただいた狭川真一氏に深謝いたします。（岩瀬由美）

参考文献

- 石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センター 二〇〇二 『金沢市豊穂遺跡』
- 金沢市 二〇〇四 『金沢市文化財紀要二二三 堅田B遺跡』
- （財）石川県埋蔵文化財センター 二〇〇九 『宮保館跡・宮保B遺跡現地説明会資料』
- 戸澗幹夫 一九九二 『加賀出土のこけら経』『石川県立歴史博物館紀要5』石川県立博物館
- 三浦純夫 一九九六 『第二章第二節 板碑の立つ風景』『中島町史 通史編』

元年は丁卯に当たる。「丁」はほとんど見えないが、「卯」は確認できる。その下には数字が記されており、「二百八十四日毎日六本能写者」となる。「四」と「日」の間隔が少しあり、そこを「ケ日」と繋ぐために「ケ」「箇」などが入る可能性もあるが、痕跡は見られない。「本」は「大」＋「十」の組み合わせで書かれている。「本」を「八十」と見ることも可能かも知れないが、文字間隔が不自然になるので「本」と見ておきたい。その下は「能写者」と読んだが、それは「能・者」は一つの定型文であるからである。要するに「二百八十四日毎日六本能写者」は二八四日の間毎日六本の卒都婆を書いたということになる。二八四日×六本で一七〇四本の大量の卒都婆になること、さらに「写」とあることから、これは卒都婆経（こけら経）の営みがおこなわれた事を示すものと考えてよい。こけら経写経という事になれば、普通には書写経典は法華経が考えられるが、法華経の普通の配字で行くと四一〇〇弱の行数になる。それでは卒都婆の数が少なく、法華経の可能性は少なくなるが、こけら経の両面写経はこの時期では普通に見られるところであり、一七〇四×二〇三四〇八としてもまだ少ない。ところが「二百八十四」が「三百八十四」の可能性もあり、そうすると三八四×六×二〇四六〇八となり、法華経と一緒に写されることが多い開結二経・阿弥陀経などを含めると丁度良い数になる。「三百八十四」の可能性も残しておきたい。

背面は表面より狭い平坦面と斜めにカットしてある両側面とからなる。背面はかなり表面の荒れが強く、木目が浮き出ているが、付着物に覆われていたために墨書が良く残っている部分が三方所ある。背面中央部には、大きな文字が配され、側面には、小さい文字が配される。

先端部は墨書はあるが、読めない。最初の墨書の良く残る部分は「毎日」または「毎月」のいずれかであろう。供養の内容がそこに書かれていたと考えられる。右側面部の最上部は「為」の可能性がありそうである。

二番目の墨書の残る部分は「三十三□」が明瞭だが、「□」部分は上部

だけ残っており「本」の可能性があるが確定はできない。「本」とすると卒都婆の数に関係するものと考えられる。この側面部は「兼為同□」と読める。先の「為」に続いて為が連続するので、この部分には被供養者が書かれていたと考える事ができる。「□」の上が「同」であるので被供養者で同□となるのは同朋・同縁・同族などのグループを示すものと考えられるが、不明である。「三十三本」とするなら、この数の卒都婆が同□の為の造立であることを示すことになろう。それ以外に、卒都婆で「三十三」の数字と関係する場合として三十三回忌供養なども考えられるので、その点も考慮しておく必要がある。

次は「□□□御卒都婆」だが「御」は少々不明確。次の「卒都」は間違いない。次の「婆」は不明確であるが、「婆」の下の「女」らしき痕跡はかすかにわかるので、「婆」としておく。その側面部には「為氏女」とある。氏女の表現は文献などに「〇〇氏女」と女性の個人名を出さず、出身氏名を示す方法としてよく見られるところで問題はない。

以上、読める文字について検討したが、裏面は表面で述べている営みが誰の為のものであるかを具体的に示していると考えてよい。ここで注目すべきは「為」が複数回出てくる事である。すなわちこの営みは個人の為のものでなく、複数グループ・あるいは一集団内の様々な人々の為のものなのである。

この卒都婆はこけら経写経供養が多数の人々・グループの人々によって（為に）おこなわれた際に造られたものと考えられる。こけら経は書写された後、タガで絞められどこかに奉納されるか、水辺で流されるかしたことが多く、そのことはこけら経の残存・出土状況からも窺える事である。本卒都婆はそれらのこけら経に添えられたものと考えてよいだろう。まったくの想像だが、こけら経の束の中央に立てられていたような状況が考えられる。豊穂遺跡の状況から、行事の最後に水辺で流されたものであろう。こけら経写経のあり方を示す貴重な資料と言える。

（藤澤典彦）

石川県金沢市豊穂遺跡出土の木製卒都婆について

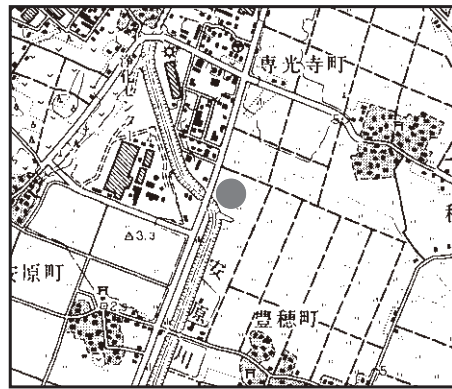
藤澤 典彦(大阪大谷大学)

岩瀬 由美(特定事業調査グループ)

一、遺跡の概要

金沢市豊穂遺跡は金沢市西部の安原川下流右岸に位置する。約七〇〇㍍西方に広がる安原海岸砂丘背後の標高約二・五㍍の低湿地に立地し、伏流水に恵まれた土地である。平成十一～十二(一九九九～二〇〇〇)年度に現地調査が行われ、古代から中世にかけての遺構が検出された。

古代においては九世紀前葉～中葉を中心とし、「大伴庄」の墨書土器が確認されたことから初期荘園関連遺跡の一角と推定される。中世においては前半(十三～十四世紀)、及び後半(十五～十六世紀)の二時期の遺構が確認され、前半期においては井戸跡や区画溝とみられる遺構が確認されていることから、集落の一部を調査したものと判断される。後半期は溝遺構を確認したに留まるが、その年代から、本遺跡北東部に比定されている浄土真宗寺院、吉藤専光寺跡との関連が想定されている。



第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000)

これら調査成果は平成十四(二〇〇二)年度に発掘調査報告書として刊行されたが、その中で報告したSD31出土の木製卒都婆(第2図1)について、その後に保存処理が行われた結果、処理前よりも墨痕が鮮明となり、釈文の修正が必要になったこと、かつ、裏面にも墨書がなされている

ことが新たに判明したため、大阪大谷大学の藤澤典彦氏に釈読をお願いし、ここに改めて報告するものである。(岩瀬由美)

二、出土卒都婆について

卒都婆は長さ六六・八㍍、幅三・九㍍、厚一・五㍍を計る(報告書記載数値)。上部は五輪塔形を刻み、下端部は各面からの削りが入り先端を尖らせており、おそらく挿し立てて使用されたと考えられる。表面は平坦だが、背面の平坦部は幅が狭く、背面左右角(両側面)は斜めに大きく面取りされている。

各輪の刻み目は余り明瞭ではない。卒都婆は新しくなると、空・風輪幅が地輪幅に近づいてくる傾向がある。要するに左右からの彫り込みが省略されるようになるのである。本卒都婆は空・風輪が全体幅より狭く削り込まれており、古い卒都婆である事は明瞭である。

また、空輪の形はやや細めであり、先端の尖りは左右の内彎するカーブが自然に交差して形成されており、先端を無理に尖らせたところが無く、この点も古いタイプの五輪塔に通じる。

墨書は読めないところも多いが、一応以下のように読んだ。

【表面】

□・□・ラン・バン・ア 永和元年 二百八十四 日毎日六本能写者

卯

【裏面】

為□・□ 兼為同□ 為氏女

毎日(月) 三十三□ □□□御卒都婆

梵字部分は「ア」に空点が無く、キャ・カ・ラ・バ・アの四門展開の菩提門ではなく大日法身真言と考えられる。その下は年号で「永和元年」とあり、西暦一三七五年に当たる。その下に左右に割って干支がある。永和

石川県埋蔵文化財情報

第23号

発行日 2010(平成22)年3月31日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本確文堂

© (財)石川県埋蔵文化財センター